主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2011
graph magazine vol. 19

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 19 定価100円（本体95円）

メッセージ

4 七つの偉大なる発見　ゴットホルド・ベック

18 霊的喜びに満ちたロングキャンプ　重田定義

3人の証し

22 主にあって両親に従いなさい　和田周作

38 御霊によって一つにしていただいて　和田亮子

52 主よみもとに近づかん　田中美智子

こどもと若者の証し

61 狩俣優太くんの証し

62 中山ひとみさんの証し

64 久保はんなさんの証し

66 松元ふみ姉妹の証し

71 酒井歩実姉妹の証し

76 須藤 翼兄弟の証し

84 祈りにつつまれたドイツ喜びの集い　水渡紀久雄

90 キリスト集会へのご案内

96 集会の出版物





七つの偉大なる発見

ゴットホルド・ベック

私たちにとって最も大切なことは岩のように動かない、昨日も今日も永遠に変わることのない主イエスと出会うことです。この主を知ることです。

ニコデモは主イエスと出会って、主イエスを知り、七つの発見をしました。ニコデモの発見したものについて聖書から見てみることにしましょう。

さて、パリサイ人の中にニコデモという人がいた。ユダヤ人の指導者であった。この人が、夜、イエスのもとに来て言った。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行なうことができません。」イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいって生まれることができましょうか。」

イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。」

ニコデモは答えて言った。「どうして、そのようなことがありうるのでしょう。」イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こういうことがわからないのですか。まことに、まことに、あなたに告げます。わたしたちは、知っていることを話し、見たこ

とをあかししているのに、あなたがたは、わたしたちのあかしを受け入れません。あなたがたは、わたしが地上のことを話したとき、信じないくらいなら、天上のことを話したとて、どうして信じるでしょう。だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・1～16）

ここに出てくるニコデモという人は、真剣に真理を求める人でした。彼は、イスラエルの民に属しており、人々から広く認められた教師でした。3章10節によると、主イエスはニコデモに「あなたはイスラエルの教師である」とおっしゃられました。原語を見ると、イスラエルの中でただひとりの特別な教師という表現が使われていることがわかります。また、3章1節には、「パリサイ人の中にニコデモという人がいた。ユダヤ人の指導者であった。」とあるように、彼がユダヤ人の指導者のひとりであったことがわかりますが、教師としては、別格の人であったのです。

ニコデモは最高の教育を修めた人でした。彼は広く一般に認められた人格者でした。彼は道徳的に高尚な模範的な生活を送っていたのです。しかし、心の奥底は孤独で満たされない状態でしたので、高齢に至るまで、真理の探究者であり続けました。彼は旧約聖書を知り尽くしていました。もちろん、来たるべき救い主の約束をよく知っていたはずです。ニコデモは、主イエスについて、主イエスの教えについて、また主の奇蹟についてもいろいろと聞いていました。彼は真理を求め続けていましたので、主イエスを個人的に尋ね、もっとよく知りたいと思いました。

私たちは、主イエスが私たちよりもはるかに忙しく、大変な毎日を過ごしておられたことを知っています。あらゆる地方から病人が主のもとに連れてこられるなど・・・主イエスは食事をする時間さえ見いだせないほどでした。そして、弟子たちが疲れ果てて横たわっているとき、主イエスは立ちあがって何時間も山の中で、ただ一人で祈られました。

そういうことですから、昼間、主イエスと個人的に話し合うことは、実際問題として不可能に近いことでした。そこでニコデモは、夜に主イエスのところにやって来たのです。

ニコデモは正直かつ、率直に自分の問題を持ってやって来ました。そして、主イエスのもとに来ることは決して無駄にはならない、ということを経験しました。主イエスはすべての質問に答えてくださり、あらゆる問題を解決なさり、真理へと導いてくださるのです。

主イエスのご臨在のもとでニコデモは驚くべき発見をしました。すなわち、模範的で正直な努力にもかかわらず、自分が霊的には盲目で死んだ者であり、失われた者であるということがわかったのです。神の国についての、もっとも根本的な真理を彼はそれまでわかっていなかったのです。

今日も、ある人々は忠実に礼拝に参加し、洗礼を受け、熱心にご奉仕し、多くの良いことを行なっているにもかかわらず、主なる神の目には、ニコデモのように霊的に盲目で、死んだ者であり、失われている、そういう人々が大勢います。

見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。こうい

う人々の中には、家々にはいり込み、愚かな女たちをたぶらかしている者がいます。その女たちは、さまざまの情欲に引き回されて罪に罪を重ね、いつも学んではいるが、いつになっても真理を知ることのできない者たちです。（2テモテ　3・5〜7）

主イエスとの会話を通してニコデモは、「七つの偉大な発見」をしました。そこでこれから、そのことについて、少し考えてみることにします。

第一の発見

「主は、主イエスが求めるたましいには、出会う備えを持っておられる」ということでした。すなわち、個人に対する神の配慮を知ることができました。ニコデモは次のようなことばで主に語りました。

先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行なうことができません。（ヨハネ　3・2）

ここでニコデモは、「三つのこと」について語っています。すなわち、「主イエスが主なる神のもとから来られた」ということ、次に、「主なる神が主イエスとともにおられる」ということ、そして、第三に、「主はお出来になる」ということです。

ニコデモの心の奥底にあった問題は「私たちは、いかにして永遠なる神の国に入ることができるか？」という問題でした。しかし、ニコデモがこの問いをことばで言いあらわす前に、主はその答えを彼に与えてくださいました。真理を求め救われたいと思う者は、主イエスが答えてくださるということを知ることができます。というのは、主は昨日も今日もいつまでも変わらないお方だからです。私たちにも、主の招きがあてはまります。

さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」（ヨハネ　7・37、38）

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

まことに主は渇いたたましいを満ち足らせ、飢えたたましいを良いもので満たされた。（詩篇107・9）

真理に飢え渇いている者は、主イエスは心の飢え渇きを満たすことがおできになることを経験するようになります。ニコデモは真理の探究者でした。聖書の知識によっては満たされませんでした。というのは、彼は、広く認められた立派な聖書学者として、豊富な聖書知識を持っていたにもかかわらず、その聖書知識によってもまことの救いを知らなかったからです。

聖書の戒めを守ることによっても、まことの満たしは与えられませんでした。ニコデモが必要としたものは、「いのちの水」であり、「心の安らぎ」だったのです。永遠の救いをほんとうに得たいと思うならば、先入観念を捨て、自分自身に頼ることをやめ、生ける救いの神を求める必要があります。

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうす

れば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。（イザヤ　55・6、7）

ニコデモは主イエスのご臨在において、すべての自分の努力、あらゆる宗教性、自分の正義というものが、永遠なる主の前にまったく無価値なものであることを知りました。

主イエスは求めるたましいを迎えてくださいます。主イエスはあらゆる人のために、時間を作ってくださいます。主イエスは苦しみや悩みをご存じであられ、解決することがおできになります。これこそがニコデモの経験した最初の発見でした。

第二の発見

第二の発見は、「主イエスは、偉大な教師以上のお方である」ということでした。すでにニコデモが主イエスと出会う前に、彼は、主イエスが教えと行ないにおいて、比類のないお方であると確信していました。それからニコデモがひき出した結論は、主イエスが神から来られたお方であるということ、主なる神ご自身が主イエスとともにおられるということでした。しかし、ニコデモが主イエスと出会ったとき、主イエスはそれ以上のお方であることがわかりました。

もちろん、主イエスはあらゆる時代の最大の教師です。それまでだれも主イエスのように語った者はいません。主のみことばは人間のあらゆる教えをはるかに越えています。そのことは当時一般に認められていました。

> イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。というのは、イエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられたからである。（マタイ　7・28、29）

しかし主イエスは教師であるよりも、まず第一に「救い主」なのです。というのは、私たちは、私たちに教えてくれる誰かを必要としているのではなく、私たちを救ってくださるお方を必要としているからです。

最大の聖書知識でさえ、私たちを救ってくれません。救いは人間の心の中で、主なる神だけが成してくださる行ないなのです。つまり、救いは罪の問題の解決です。御使いは主イエスのご降誕の前に、なぜ主イエスが来てくださるのかを発表しました。

> マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。（マタイ　1・21）

イエスという名前は「罪からの救い主」です。

第三の発見

第三の発見は、「肉によって生まれた者は肉である」ということでした。肉はいつまでも肉にとどまります。私たちは私たちの生まれつきの性質を変えることができません。それは、罪を犯すことしかできない、罪の性質です。

> ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。（詩篇　51・5）

> 私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。（イザヤ　64・6）

人間の生まれつきの性質、すなわち、肉は、非常に礼儀正しく、敬虔で、外から見ると良いように見えるかもしれません。しかし、主なる神の目には、

とても受け入れられないほど罪に汚れているのです。主なる神の霊による新生の経験こそが何よりも大切です。

第四の発見

第四の大発見は、「まことの救いは宗教とは何の関係もない」ということであり、また、単なる頭の知識とも関係はないということでした。すべての人間の行ないは、救われることにとって妨げになるだけです。主イエスはそのことをはっきりとおっしゃいました。

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいって生まれることができましょうか。」

イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。

（ヨハネ　3・3〜7）

救われたいと思う人は新生を経験しなければなりません。ここで大切なことは、外側の変化ではなく、まったく新しい創造です。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

（2コリント　5・17）

新生はただ単に決断することではありません。「今から私は集会に行きます」、「私は聖書を読みます」、「私は祈ることをします」、こうしたことはすべて外側のことです。主なる神の救いは新生から始まります。

人は、罪人として主イエスのみもとに来て、主を自分の救い主として受け入れることによって、まったく新しいいのちを持つようになります。主イエスを持つ者は永遠のいのちを持ちます。永遠のいのちを持つことこそ、新生です。

第五の発見

第五の大発見は、この「新生が絶対に必要である」ということでした。

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」（ヨハネ　3・3）

主イエスは「新しく生まれなければ、何をやっても無駄で、むなしく、役に立たない」ということばを使っておられます。

あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。

（ヨハネ　3・7）

主イエスははっきりと「あなたがたは新しく生まれなければならない」というみことばを用いておられます。救われたいと思う者は、新しく生まれなければなりません。天国に行きたいと思う者は新しく生まれなければなりません。ですから私たちが「本当に新しく生まれ変わっているかどうか」というこ

とはもっとも大切な問題なのです。要約しますと、

新生なしには人間は永遠のほろびに定められています。
新生なしにはまことの喜びも平安もありません。
新生なしには生き生きとした望みは存在しません。

ということになります。

第六の発見

第六の大発見は、「新しく生まれ変わるのに、歳をとり過ぎていることはない」ということでした。

ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいって生まれることができましょうか。」

（ヨハネ　3・4）

主イエスは彼にはっきりとした答えを与えてくださいました。「ニコデモよ。あなたも新しく生まれることができるのです」。もちろんこれは自然のことがらではなく、超自然のことがらであり、霊的な覚醒を意味しています。今まで霊的に死んでいたあなたも、新しく生まれることができます。あなたは生ける神と結びつくことができ、あなたの債務が帳消しにされ、あなたが本当の救いの確信を得ることを経験できるのです。主イエスを信じ受け入れる者は救われて、父なる神の子となるのです。

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

（ヨハネ　1・12）

第七の発見

第七の大発見は、「新しく生まれるためにはただ一つの道だけが存在する」ということでした。なるほど、富士山の頂上に至るための道はたくさんあります。しかし、救われるためには、ただ一つの道しかありません。

「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・14〜16）

主イエスはニコデモを愛してはっきりとおっしゃいました。「わたしは荒野における蛇のように、上げられなければなりません。わたしは十字架につけられなければなりません。そのことによって、わたしは、あなたにくだされなければならないはずの罰をわたしの身の上に受けるのです。身代わりとなるわたしの死によって、あなたの債務は帳消しにされ、罪は赦されるのです。」

「あなたは救われて新しく生まれたいと望むならば、わたしを信じなさい。わたしの贖いの死は世の罪の債務を帳消しにするために充分であるということを信じなさい。生ける主なる神はあなたを心から愛しておられます。主なる神は、あなたの代わりにわたしを犠牲にし、わたしをお見捨てになります。それはあなたがわたしを信じることによって、永遠のいのちを持つためなのです。」と主イエスはニコデモにおっしゃいました。

「救われるための道はきわめて簡単です」。永遠

のいのちを持ちたいと思う者は、だれでもそれを持つことができます。だれであっても救われるには歳をとり過ぎていることもなければ、若すぎることもありません。また、どのような人であっても救われるには悪過ぎるということもなければ、愚か過ぎるということもありません。

十字架につけられたお方はご自身の上に罰を受けてくださいました。よみがえったお方は今日も私たちのまん中におられ、だれに対しても全き罪の赦しを提供しておられます。主があなたに約束しておられることに耳を傾けてください。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。（ヨハネ　5・24）

主イエスと主のみことばを信じる者は永遠のいのちを持っています。永遠のいのちを持つ者は、もはや、さばきに会うことがありません。というのは、身代わりとなってさばきをうけてくださった方ご自身が、今や、私たちのためにとりなしてくださり、弁護してくださるからです。主イエスを持つ者は、死からいのちへ移されています。

救われた人々はみな、ニコデモが発見したと同じ「七つの大発見をした者」です。彼らは次のように告白しています。

1「主イエスは私を迎え入れてくださり、私が求める前に私を探し出してくださいました。主イエスはただ単に私の苦悩を理解してくださっただけではなく、私の罪の問題を解決し、すべての悩みを解決してくださいました」

2「主イエスは偉大なる教師以上のお方であり、私の救い主、贖い主です。主は私の罪と債務を赦してくださいました。主は私に真の安らぎを与えてくださいました」

3「肉は肉にとどまり、決して良くなることはないという、主イエスの言明を共通して経験しました。自分の努力はどのようなものであっても、まことの救いの喜びを得るためには助けとなりませんでした」

4「主イエスは宗教をお与えになりません。新生を通して私は永遠のいのちをいただきました」

5「主イエスは新生を通して私に新しいいのちを与えてくださっただけではなく、真の喜び、深い平安、生ける望みをも与えてくださいました。新生なしには私はおしまいだったでしょう」

6「私は救われました。また、私でさえ贖われました。ですから、救いの可能性はどなたに対しても開かれています。主の恵みはだれに対しても十分であり、主はすべての人をあわれもうと望んでおられます」

7「永遠の救いに至る唯一の道は、主イエスです。主を知ることは本当の意味で生きがいのある人生を知る土台です。主イエスは完全な満足を与えてくださるからです」

これこそ、救われた兄弟姉妹の証しなのです。この大いなる主が、すべての兄弟姉妹の生活を通してほめたたえられ、あがめられますように。



霊的喜びに満ちたロングキャンプ

重田 定義



見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。

（詩篇 133・1）

二〇一〇年の六月十二日から二十日までの九日間と、七月三十日から八月八日までの十日間の二回、御代田福音センターで「喜びの集い」が開催されたことはご存知のとおりです。ドイツでは毎回七日間のキャンプが行なわれてきましたが、国内では今まで地方で二日間、御代田で三日間のキャンプだけで、九日間、十日間という長いキャンプは今度が初めてでした。そして、このロングキャンプに全国から集った多くの兄弟姉妹はみな笑顔で、心からよかった、よかったと喜び合ったのでした。

しかし、なにがよかったのでしょうか。それは毎日のように行なわれた交わり会を通して、信者同士が心ゆくまで交わり、霊的に一致できたという喜びと恵みを味わったからではないでしょうか。これがロングキャンプの大きな特徴といってもよいと思います。

信者の霊的な交わりは、教会が主をかしらとし、一人ひとりの信者がからだの部分として互いに有機的に結び合い、一つとされて主の生けるみからだを形成するうえでたいへん重要であります。信者の交わり会はそのためにあるといってもよいでしょう。しかし、これまでのキャンプでは期間が短いこともあって、結婚式や納骨式、記念会などの行事に時間をとられ、なかなか十分な交わりの時間が持てなかったのは事実でした。

ロングキャンプでの交わり会の中心は兄弟姉妹の証しでした。私たち信者の信仰を一本の木にたとえ

ると、みことばと御霊は栄養分豊富な樹液であり、証しはその樹液によって養われ、育まれて豊かに実った信仰の実であり、主のご栄光の現れそのものということができましょう。

ロングキャンプでは、連日午後、交わり会が行なわれ、そこでは夫と妻、親と子、姉と妹など、さまざまな組み合わせによる信者の証しがありました。集った私たちは、その証しを通して、数や色や形や大きさはさまざまであっても、どの実もキリストの香りに満ち満ちた信仰の実を十分に味わい、自分たちのうえにも同じように生きて働かれている主の大いなるみわざを覚えながら、感謝しつつ交わりの時を過ごし、霊的に満ち足り、改めて主のみわざのすばらしさと、主にあって私たち信者が一つとされたという喜びと幸せを共有する日々を過ごすことができたのです。まさに冒頭の詩篇のみことばのとおりの思いでありました。これこそがロングキャンプでなければ味わえない恵みであったと思います。

そしてまた、姉妹方による長いキャンプを通しての食事の準備をはじめとする、数々の無私の主へのささげものとしてのご奉仕によっても、私たちは主にある愛の温かさとともに、主にある一致の思いを深めさせていただくことができました。これも、このロングキャンプの大切な実であったことを覚えます。

ロングキャンプは、経費や日数などの関係から、どこでも、またいつでも、できるというわけにはいきません。しかし感謝なことに私たちには御代田福音センターという、大きなすばらしい施設が主から与えられているので、自由にロングキャンプを計画することができるのは、なんという恵みでありましょうか。

イエス様は、主を中心として一つとなった私たち信者の交わりをこの世の人々が見ることによってイエス様の愛を知ると、ヨハネの福音書17章22～23節でおっしゃっています。

わたしは、あなた（父なる神様）がわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたち（父なる神様と御子イエス様）が一つであるように、彼らも一つであるためです。わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです。

終わりの世にあって、サタンの激しい攻撃を受けている私たちの集会が、主の生けるみからだからなる教会として、ご再臨の日まで福音の光を高く掲げる燭台の役割を果し続けるために、ロングキャンプがこれからも全国の集会の多くの兄弟姉妹方が集い、ともに一つ心となって交わり、一つに結び合うことができることを喜び合い、主のご栄光を拝する場として、主のご愛を証しすることができる場として、用いられることを心から願う次第です。



重田定義
東海大学医学部名誉教授。
慶應義塾大学医学部専門部卒業。
東京都出身。

主にあって両親に従いなさい

和田 周作



周作さんと亮子さん



後列左、周作さん

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。（詩編 115・1）

子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする。」という約束です。（エペソ 6・1〜3）

私は、一九七七年に和田芳明・ヒロ子の二男として生まれました。私が、集会に初めて来たのは十歳（四年生）のときでした。はじめは親に連れられ、その後は一つ上の兄と横浜から三つの電車を乗り継いで一時間半かけて日曜学校に通いました。もともとは横浜の教会に通っていましたが、そこでは、子供たちと仲良くなれずにいました。はじめて吉祥寺の集会所に入ったとき、同学年の人が声をかけてくれて、よく来たね、一緒に遊ぼう、と言ってくれたのが嬉しい思い出です。

中学生になったとき、横浜の白楽に集会が与えられ、大学二年まで通うようになりました。この頃は、学校と集会・家庭では別の顔を持って生活していて、親の目を盗んで、わがままな生活を楽しもうとしました。しかし心に植え付けられた御言葉と、良心の呵責から逃れることができずにいました。でも、その悩みを正直に親に打ち明けることはしませんでした。言えば、怒られる、そして行動を制限されると思ったからです。大学二年のときに、付き合いをしていた女性とのことで、自分の罪の大きさを知らせられるとともに、家族には亀裂と激震を与えました。家族は、私の霊のために何が必要かを必死に祈り求め、主にある兄弟姉妹の霊の交わりのそばにいることが何よりも大切であると示され、横浜を離れ、吉祥寺

に引っ越し、吉祥寺集会に集うようになりました。

二〇〇一年に大学院を卒業し、就職しました。それと同じ頃に、結婚の導きも与えられ、亮子姉妹と初めて出会いました。

私は、学生時代のお付き合いの体験から、どんなに好きでも気持ちだけでは長続きしないことを知りました。また自分の目がいかにあてにならず、自分では結婚相手を探すことはできない。イエス様が与えてくださらなければ、祝福された結婚はできないだろうと考えていました。自分から誰かに結婚してください、と言う気持ちは全くありませんでした。きっと失敗すると思ったからです。

しかし、一人でいることも寂しいに違いないと感じていて、ひそかにイエス様には結婚を祈っていました。

そのようなときに、突然、この人はどうか、と話がきたのです。私は、主イエス様が用意してくださった方なら間違いないと確信して、面識もなかった亮子姉妹のことを祈るようになり、結婚へと導かれました。社会人になって間もない自分が、生活の基盤もまだ無いのに、結婚へと導かれたのは、本当に不思議でした。そして、亮子姉妹と結婚式の準備をしている中で、お互いのことを話し、イエス様が中心になってもらえる家庭になるといいね、という共通の信仰が与えられていることを喜びました。どんなに迷い、どんなにみじめな性質をもっていても、イエス様に頼ることができ、イエス様のところに夫婦で助けを求めることができれば、他は何もいらない、という喜びを頂くことができました。自分たちの感情の外側で、イエス様が繋いでくださっている安心を感じ、それが、支えになりました。それは、イエス様が一番という土台です。

結婚した後、私は、御言葉にある「父母を離れ妻と結ばれ」という箇所から、独立意識を持って両親を離れ、夫婦で歩むことが大切であると考えるようになりました。まずは親を頼らずに、自分でいろいろと決めて、進めることが大切だと思い、仕事のこと、家庭のことも、これは自分たちの問題と考え、両親に話したり、共に祈る、そうした生活から遠く離れました。

それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。（ルカ　15・13）

そのような私自身の霊的放蕩に対して、イエス様が私たち家族になしてくださった大きな恵みの一つとして、転職して現在の職場に移されたときのことを、イエス様への感謝としてお話できればと思います。

最初、私は、二〇〇一年に集会の兄弟が経営しておられる会社に入社しました。その会社には、大学生のころからアルバイトでお世話になり、アルバイトのときから数えれば七年ほどいたことになります。大学院では、生産管理という分野の研究をし、ＩＴ系の仕事を目指しており、入社後は、会社でソフトウェアの開発や社内のシステム管理など、様々な仕事をさせていただきました。

何よりも、その会社に入りたいと思ったのは、まだ高校生のころ、会社の人が全員で夏休みを利用して喜びの集いに参加されているのを見て、いつか自分も主にあって、同じ目的を持って働きたいと願っていたことがもっとも大きな理由でした。私にとって、初めての社会人生活は、会社での訓練に加えて兄弟姉妹と祈ることができる恵みも同時に頂いたとても大切な時間でもありました。

その後、ビジネス状況によってＩＴ系の仕事が無くなったとき、社長からは、「転職して、本業である、ＩＴ系の仕事についたほうが良い」とのアドバイスを頂きましたが、兄弟姉妹と働くことができる環境に居させてくださいと、お願いし、ドイツパン

和田周作

の店員に転向しました。ときには配達や、厨房に入ってパンを造る仕事にも就きました。気持ちのほうが先行し、兄弟姉妹と働ける喜びだけを純粋に感じていましたので、そのときは迷いがありませんでした。

人は自分の行いがことごとく純粋だと思う。しかし主は人のたましいの値うちをはかられる。

（箴言　16・2）

人は自分の道はみな正しいと思う。しかし主は人の心の値うちをはかられる。

（箴言　21・2）

このころ、会社で働く方々が、自分にとっていつのまにか家族以上の存在になっていて、会社の仲間と協力して、一つの仕事をしていくことはとても大切なこと、と感じていました。寝る時間よりもみんなと一緒に働くことが楽しく疲れを感じませんでした。私は会社の兄弟姉妹と共に祈り、共に助け合って仕事をすることに一つの生きがいをもっていました。ちょうど結婚したばかりの私は、夫婦で一緒に働いたり、家庭をはじめて持った喜びでますます力が出て、一生懸命働いていました。この期間、私は、集会の兄弟姉妹や実の両親との交わりをほとんど持たなくなりました。

お店で働くようになってからは、礼拝に出るためにお店を休むことはできない、ときどき交代で礼拝に出られればよいではないか、と考えていました。あるとき、両親から、「どうして礼拝に出ないのか？」と尋ねられたとき、「礼拝に出ないわけではない、日曜日に仕事がなければ、出るよ。でも今は、この会社で与えられた仕事をしっかり行うことが大切だし、自分だけ休んでいることはできない」と反論しました。両親との間は険悪になり、交わりはなくなり、かえって反発と疑いの日々でした。自分の気持ちを分かってもらえないストレスも出てきました。気の会う兄弟姉妹とだけで話をするようになり、同情してもらったり、親を批判するようになりました。

主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。わが子よ。あなたの父の訓戒に聞き従え。あなたの母の教えを捨ててはならない。それらは、あなたの頭の麗しい花輪、あなたの首飾りである。

（箴言　1・7～9）

わが子よ。私のおしえを忘れるな。私の命令を心に留めよ。そうすれば、あなたに長い日と、いのちの年と平安が増し加えられる。恵みとまことを捨ててはならない。それをあなたの首に結び、あなたの心の板に書きしるせ。

（箴言　3・1～3）

この頃の私は、主に従っていると思っていましたが、実のところは、御言葉を捨てていたのです。夫婦では、いろんな話をしました。でもその多くは、「なぜ親は私のことを分かってくれないのか。どうして、礼拝にちょっと出ないだけで、イエス様から離れていると思うのだろうか。まるで救われていない人を見るような目で話しかけられるのがとてもつらい」といったものでした。心を閉ざし、かえって仕事に執着しました。

この期間は約二年半ぐらい続きました。その間に長女めぐみが与えられました。ときどきキャンプで両親と顔を合わせることはありましたが、普段の日は、実家に行く時間をつくらなかったので、めぐみも両親にはなつきませんでした。

そのような中で、私たちは自分たちのもっていたお金で夏のドイツキャンプに参加しました。ほら、自分たちもちゃんと必要な休みをとってキャンプに出ているよ、とでも言わんばかりでした。でも、ド

イツキャンプでは両親とは一回も交わらず、自分たちでドイツパン屋巡りをして、お店の参考になる情報を探したり、それはそれで楽しかったですが、内心は、なんのためにキャンプに来ているのか、という気持ちも少なからずありました。

どれだけ両親、家族、また自分たちのことを祈っていた兄弟姉妹が心を痛めていたかを考える余裕はありませんでした。

そのとき、あなたは言おう。「ああ、私は訓戒を憎み、私の心は叱責を侮った。私は私の教師の声に聞き従わず、私を教える者に耳を傾けなかった。私は、集会、会衆のただ中で、ほとんど最悪の状態であった。」と。（箴言　5・12～14）

ついに両親は、私が勤務中のお店に来て、「なぜ礼拝に出ないのか？」と再び話を切り出しました。泣きそうな気がしました。どうしてこんなことになったのか。一生懸命兄弟姉妹の会社で喜んで仕事をしていたのに、いつのまにか問題児にされてしまっている。この会社に働くことも、当初は、両親も喜んでいたではないか。そういった思いが心の中を駆けめぐりました。私は両親に、「自分が休んだら誰が代わりの仕事をするの？自分だけ休むことに、父さんたちは平気なの？兄弟姉妹のことを考えなくても気にならないの？それこそ自分中心じゃないか？」と返しました。

父は、私に、「父親として自分の息子が主を礼拝しないことが一番の問題である、言わないわけにはいかない」と言いました。私は何を言われているかわかりませんでした。人のことはどうでもよい、という言葉尻だけが頭に残り、怒りがわいてきました。

そして、「父さんたちは、僕がイエス様を信じていないと思っているんじゃない？そんなことはないよ。会社でも沢山のお祈りと交わりに支えられている。集会と同じじゃないか。何がいけないのか？」と反抗しました。

この話はお店の前で一時間も続き、仕事中なので、話を打ち切って仕事に戻りました。ちょうど、二〇〇五年七月ごろだったと思います。自分の心の中には隠し事なんてない、こんなに正直に話しているのに、分かってもらえないことが重荷となり、仕事にも集中できなくなり精彩を欠くようになりました。

愚かな子はその父の憂い、これを産んだ母の痛みである。（箴言　17・25）

父には、「居酒屋にでも行って、飲みながらとことん話しあおう、そうしたら僕の気持ちも分かるし、真剣だということも分かるから」と何度も言いましたが、父は、「それは大事なことではない。父さんが一番心配しているのは、あなたと主イエス様との関係についてだけなんだ」と言いました。

「だから、それについても心を割って話そうよ」と言いましたが、「話があるなら、それをイエス様に祈ったらいい」と言われ、電話でも三時間泣きながら平行線の話をしました。そばには、亮子姉妹もいました。家族絶縁の危機でした。亮子姉妹にも、大きな心の痛みを与えてしまいました。でも、自分ではどうすることもできない所まで来ていました。

両親は、私の霊的な状態を心配し、ベック兄と交わってもらいなさいと勧めました。また吉祥寺の祈り会の課題にも出したようです。いったい自分は何をしたのか、と思い、本当に苦しいときでした。

私は何をベックさんに話したらいいのか分からない、何が問題なのかも分からない状況でしたので、自分がいまベックさんのところに行っても、両親が自分を信じてくれない、という程度の話しかできな

主イエス様のみこころと離れていたら？

しかしペテロは、「あなたの言うことは私にはわかりません。」と言った。それといっしょに、彼がまだ言い終えないうちに、鶏が鳴いた。主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う。」と言われた主のおことばを思い出した。彼は、外に出て、激しく泣いた。

（ルカ　22・60～62）

しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。「父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。

（ルカ　15・17）

自分の思ってきたこと、主張してきたことが音を立てて崩れました。まったく自信がなくなり、仕事

いことは目に見えていました。

仕事が忙しくなるなか、両親から繰り返し伝えられた言葉、「あなたはなぜ礼拝しないのか、礼拝したくないのか、あなたはイエス様を愛しているか」が頭の中をぐるぐる回るようになりました。それまでは、両親の言葉に反発し、自分の気持ちをぶつけていましたが、両親は、それをイエス様に祈りなさい、と私の怒りの矛先を主に向けさせました。

確かに、イエス様を信じているし疑ってもいない。でも「愛しているか」という言葉が、胸に刺さって取れませんでした。私は確かに兄弟姉妹が好きだし、仕事も一生懸命やり遂げたいし、集会にも出られればよいと思っている、でも、それって本当に主を愛していると言えるのだろうか…。

この言葉が引き金でした。はじめて自分の中に、「自分の考えていること、イエス様を信じる気持ち、自分の考える兄弟姉妹との交わり」そのすべてが、

でもミスを沢山するようになり、周りからも分かるぐらい精彩を欠いていました。

今まで、本当に兄弟姉妹とともに働くことは生涯大切なことと思っていた考えが自分の思いであり、結局は自分の考えが正しいとし、イエス様のみこころを無視してきたものであったこと、そして、その間も、主イエス様のみこころがどこにあるのかは、まったく訪ね求めず、自分が主を信じている気持ちがあればそれで十分、生き方は人それぞれと割り切っていた思いがまったく主を愛することではないことを知らされました。本当に電撃的な啓示でした。それまで疑うことがなかったことを疑うようになったのです。

このままでいいのだろうか？という気持ちをもったまま、しばらく仕事を続けましたが、答えはありませんでした。そして八月の御代田のキャンプではなく、その間の平日に休みをとり、一人でベックさんに会いに行きました。ちょうど亮子姉妹は、二女まことを妊娠しており、里帰り中でしたので、わたし一人で思い立って新幹線で御代田に向かい、ベックさんと少しの時間交わりを頂きました。実際、何をどう交わったらよいか分かりませんでした。でもそれまでには、自分が正しい、自分の信仰は純粋だと思っていた気持ちがもはや完全に砕けていたため、ベックさんと交わったときの一声は、「自分はどうしたらよいのでしょうか、何を祈ったらよいでしょうか。両親は僕に何を伝えたかったのでしょうか」でした。

立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。

（ルカ　15・18～19）

ベックさんは、一言だけでした。「本当にあなたのことを心配しているのは家族、特に親だけだよ」。

これがすべてでした。涙がいっぱい出ました。長い眠りから覚めた気分でした。結婚後、自分の家庭を必死で立上げ、両親から独立して自分たちで築くことが独立の意味であると考え、なんでも自分で判断し、何をするにも自分なりに考え、まったく親にも相談することはせず、背伸びをし、信仰生活も親に負けないという気持ちで、両親と同じ立場に台頭しようとしていた自分の傲慢や自己実現、御言葉の間違った解釈のすべてが思い知らされました。

子供は大人になっても、主の建てられた秩序によって子供として両親を敬い、両親のことばを御言葉によって聞くことは、祝福の原則であることをはじめて受け入れました。

子供の立場にいてよいことに安心し、両親に心からごめんなさいと謝りました。これからどうしたらよいか分からないけれど一緒に祈ってほしい、と言うことができました。結局、自分は、この期間、妻である亮子姉妹と両親との交わりの壁にもなり、自由な交わりを妨げていました。

私たちは、そむいて、主を否み、私たちの神に従うことをやめ、しいたげと反逆を語り、心に偽りのことばを抱いて、つぶやいている。「しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中のそむきの罪を悔い改める者のところに来る。」—主の御告げ。—「これは、彼らと結ぶわたしの契約である。」と主は仰せられる。「あなたの上にあるわたしの霊、わたしがあなたの口に置いたわたしのことばは、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、すえのすえの口からも、今よりとこしえに離れない。」と主は仰せられる。

（イザヤ　59・13、20〜21）

私たち夫婦にとって必要なことは、イエス様との交わりの回復、主イエス様の御心を尋ね求めそれに従うことでした。そのことを示され、突然でしたが、すべてを主にお返しするため、社長に退職願を出しました。会社ではとても驚かれました。次の職場は決まっていませんでしたが、なぜか平安でした。

退職するまでの約一カ月、心の中は、今まで一緒に働いてきた人たちへの裏切り行為ではないか、という思いがいつもあって、苦しい期間でしたが、無事退職することができました。そしてそのすぐ後に、ベックさんがドイツの喜びの集いが十月から始まるからぜひ一緒に行こう、と誘ってくださり、生まれたばかりの二女まことを見たのち、妻の両親の了解も得て、ドイツに行きました。

沢山の交わりと恵みを頂き、イエス様を愛していない自分と、そんな私を決して離さず愛して下さった主イエス様の恵みに、ただただ主を恐れ、心から礼拝を捧げることができました。

職探し〜転職

ドイツ滞在中にも、就職活動は始めたほうが良いと導きを頂き、いくつか応募はしましたが、大学院卒業後、普通の就職活動の経験がなく、就活にも要領を得ずにいました。

そんなとき、現在勤めている会社で働いていたある姉妹から、「うちの会社もＩＴ系の仕事があるから募集を見てみたら?」と勧められていたのを思い出し、ドイツで、その会社のサイトにアクセスし、ＩＴ関係の職種に応募してみました。その会社のことをベックさんに話すと、「その会社にはかつて集会に集っていた兄弟がいるはずだからその兄弟のためにも、入社できるといいね。祈っているよ」と言われました。

私は、募集要項を確認し、提出書類となっている職務経歴書と志望動機を会社に提出したところ、面接の通知が来ました。一カ月ほどドイツに滞在していたので、日程が帰国前だったら、面接に行くことができなかったのですが、イエス様は、最善のときを用意してくださり、帰国後の面接となりました。まるで、新卒の気分を味わったかのように緊張していました。

ベックさんが言われていた兄弟がどこのオフィスにいらっしゃるかは全く知らずに面接を受けました。大学院で学んだ内容についての質問など基本的な知識についての質問などありましたが、緊張もあり、ほとんどまともに答えることができず、一次面接ではすっかり気を落としましたが、御心だけがなることを信じて家族で祈りました。「イエス様の御心はどこにあるのでしょうか。どうぞ、その道に導いてください。そうでなければ閉ざしてください。もうイエス様と関係ない道には行きたくありません。宜しくお願いします」と。以前のように、自分で道を決め、主の喜ばれる歩みをするんだという強さは全くありませんでした。

一週間ほどたったとき、会社からメールが届き、二次面接の通知がありました。びっくりしました。大学で習ったこともほとんど答えることができず、何もできなかった自分に次の道が与えられるとは、ほとんど期待していなかったからです。

二次面接では、前の職場のことを聞かれました。少し困りましたが、入社当初はソフトウェア開発からシステム管理、その後パン屋で働くことになった経緯などを話しました。そして、なぜＩＴをしていたのに、パン屋で働いたのか、という質問に、その会社は、クリスチャンの方が社長で、聖書からヒントを得た事業部で構成されていること、自分もイエス様を信じていることを話しました。このようなことは、普通は、就職の面接で話さないことかもしれません。しかし、家を出るとき、父が次の御言葉をくれました。私の勇気ではなく、この御言葉に力を得たのだと思います。

わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。

（マタイ　10・32）

面接が終わったとき、なぜか心ははればれしていました。イエス様は必ず最善の道を用意してくださっている。そこに行ければよい。自分の思いよりも、最善の道に行けたらよい、と思って祈っていました。

こうして入社することができました。しばらくして、面接で多くの質問をされた方が実は、祈られていたその兄弟だったことを知って、本当にびっくりしました。イエス様のなさることにただ、ひれ伏すばかりです。

イエス様の用意された歯車にのると、世界が変わりました。主にすべての思い煩いを明け渡し、自分の弱さを打ち明け、自分のみじめさを告白し、イエス様におゆだねします。あわれんで助けてくださいと祈ったときから、すべてが主イエス様のなさりたいご目的が自分の身に起きたからです。

イエス様は、私の心に、「愛するか」という疑問を与え、主を思い出させてくださり、御言葉に立ち返らせてくださっただけでなく、あれだけ反発していた両親に対して、秩序に従う喜びを与えてくださり、子供であることの幸せと祝福の意味を教えてくださったこと。そして、家族の交わりを回復してくださり、子供たちがいつでもおじいちゃん、おばあちゃんのところに行くことができるようにしてくださったこと。そして、私たち夫婦の心を主に向けさせて耕してくださった後は、失われている魂のために最善の道に私たちを導かれたことを知ることができました。

会社に入ってからしばらくは、自分の知識の無さや経験不足、会社の環境の違いなどに、落ち込むことがありましたが、そのときは、いつも面接のことを思い出しました。自分の能力や知識によって会社に入ったのではない。イエス様がはっきりとした目的をもって、失われた魂の救いのために、この職場に置いてくださったこと、イエス様が目的を持っておられる。だから、主が良しと言われるまで、ここで働き、主の導きを待つことにしました。結局、仕事には必要な知識も与えてくださり、今も導いて頂いております。

仕事を覚えるまで一年近くかかった間に、祈られていた兄弟は集会に戻られました。その間、信仰の話を、その兄弟と共にしたことはありません。イエス様は祈りに応えてくださるお方であることを、改めて知り、賛美しました。

これからも、自分がどう生きるか、何をするかではなく、主イエス様は何をしてくださるのかが、楽しみです。今、自分が生かされているのは、主イエス様の栄光のためであること。そして、失われた魂が救われるために、イエス様の福音をのべ伝えることだけだと確信しています。

最後に、この一連の激動の期間を、本当に文句や不平も言わないで祈って、ついてきてくれた亮子姉妹に何よりも感謝しています。本来ならば、退職し、仕事がなく、子供が生まれたばかりの中で、ドイツに一カ月も行ってしまい、愛想を尽かされても全く不思議でない自分を受け入れてくれたことに、ただ感謝でいっぱいです。そして、さびしい思いや悲しい思いをいっぱいさせてしまったと思います。本当にごめんね。そしてありがとう。これからも宜しくね。

イエス様が共にいてくださるのでなければ、この道を通ることはできなかったと思います。本当にイエス様は優しい方です。ご自身の栄光を現わすために、私たちの心にある思いを探り、ご自身の聖霊の火できよめるために訓練や試練を通されますが、それは、すべて主イエス様の素晴らしさを味わうためであり、主をほめたたえるためであることを学びました。

イエス様の尽きない愛とあわれみと贖いによって、私がイエス様を拒んでいたときから、私たちを愛して導いてくださっていたこと、何よりも十字架で私の反逆のために死んでくださったほどに、私たちが滅びることを望まないで、見捨てないで受け入れてくださっていることを覚えて感謝です。

このイエス様を信じることは大きな希望で、決して失望することはないことを体験的に知ることができました。これからも、私たちは迷ったり、イエス様を悲しませるものであることは否めません。でも、そのたびに、イエス様に感謝し、悔い改める道があることも本当に考えられない恵みだと思います。いつも、イエス様の前に素直で子供のようにしていられることを願う毎日です。そして、子供たちが、同じように、イエス様を大好きになってほしいと心から夫婦で祈る毎日です。

主よ。私は、あなたのさばきの正しいことと、あなたが真実をもって私を悩まされたこととを知っています。どうか、あなたのしもべへのみことばのとおりに、あなたの恵みが私の慰めとなりますように。私はあなたの救いを慕っています。主よ。あなたのみおしえは私の喜びです。私のたましいが生き、あなたをほめたたえますように。そしてあなたのさばきが私の助けとなりますように。

（詩篇　119・75〜76、174〜175）

和田周作
横浜市立瀬ヶ崎小、六浦中学、金沢高校、神奈川大学大学院修士課程卒、日本テキサス・インスツルメンツ株式会社勤務、妻・亮子

御霊によって一つにしていただいて

和田 亮子





右側、周作さん、亮子さんと3人のお子さま

私がこの集会に導かれたのは高校一年生の頃です。洗礼は中学二年のときに母が通っていた教会で受けましたが、教会へはたまに集う程度でした。洗礼を受けたのは、洗礼を受ければもっとよい人間になれるのではないかという考えからでした。しかし、この考えはまったく的外れであったことが後の歩みを通して知らされました。私は人間関係につまづき、高校生の頃にはどのようにクラスメートとかかわったらいいのかまったくわからなくなっていました。そのようなときに母が集会へ導かれ、やがて自分の家でも家庭集会がもたれるようになりました。また、後には礼拝ももたれるようになりました。学校で人との関わりがうまくいっていなかった私にとって、集会の雰囲気は学校よりずっと居心地のいいものでした。しばらく集っているうちに、メッセージのみことばをとおして、自分の心は、イエス様がもっともおきらいになる偽善者、パリサイ人と同じであることが示されました。また、自分からでる言葉や態度に光が当てられるようになり、自分の心の状態は、修正すればよくなるなどというようなものではなく、まったく使いものにならないということがだんだんと示されました。

大学は富山大学へ行かせていただきましたので、富山集会の兄弟姉妹にたいへんお世話になりました。私が祈り会を体験するようになったのも富山集会がはじめてでした。当時課題にあげられていた方々が、いまになってイエス様を受け入れて兄弟姉妹となっているのを見ると、本当にイエス様は祈りに応えてくださるのだなあとうれしくなります。大学卒業後は公務員試験を受けて実家に戻り、公立高校の事務を三年ほど勤めました。

仕事が四年目に入ろうとしている三月の福島キャンプのときに、ベック兄より「紹介したい兄弟がいるのだけど…」というお話がありました。そのときは

家族で祈るのにとどまりましたが、次の四月末の御代田キャンプで初めて周作兄弟を紹介されました。

実家の両親は、最初いろいろと心配してこの結婚には反対しました。私自身は、もし結婚するならベック兄から紹介があったときかな…と漠然と考えておりましたので、ベック兄からいただいた結婚のお話を断るのは気が進みませんでした。しかし両親の反対を押し切ってまで結婚へ踏み出すのはみこころではないと思い、ベック兄へお断りの電話を入れました。そして、もうこの話しを進めてはいけないと思い、次の御代田キャンプでは周作兄を見かけてもあいさつもしませんでした。ところが、電話の内容は相手に伝わっておらず、周作兄はお兄さんの宗勝兄とともに両親に挨拶に行ってくれました。両親は初めてここで本人と会ったのですが、思っていた印象とだいぶ違っていたので気持ちが変わって、帰る頃にはやっぱりベック兄におまかせしようということになりました。そして同じ月の大洗キャンプでは急に話が進み、十月の結婚式の日取りまで決まりました。

大急ぎで準備を進めた結婚式でしたが、たくさんの兄弟姉妹のご奉仕に支えられ、また、多くの方々からたくさんの祝福をいただいて、結婚式を終えることができました。

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。（エペソ　5・22～24）

結婚当初から、私は主人との間になにかぎくしゃくしたものを感じました。なにか大きな問題が起きたわけではないのですが、部屋の片づけのようなちょっとしたことや、それぞれが大切にしていることが違っているために起こる気持ちのずれなどから、ときどき気まずい空気が流れるようになりました。私は、聖書に書いてあるとおりに、夫に従えば、よい家庭になると思い、できるかぎり努力しました。しかしその努力は我慢であって、我慢は胸の中にしまってあったので、表向きは穏やかにしていても、従うことに喜びはありませんでした。また、都合のよいことは従えますが、都合の悪いところはなんとか間をとって収めてみたり、拡大解釈してみたり…の対応でした。しかし、そのような小手先の方法では長続きしませんでした。努力すればするほど、「これに従わなくてはならないのですか」と思うような難問が次々に起こるようになりました。

そのような問題を抱えながら一年ほどすぎて、長女のめぐみが与えられました。名前の由来は、結婚式のみことばと同じ詩篇115篇1節、「私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。」からとりました。その名前のとおり、イエス様からの一方的な恵みによって、まだ子どものような歩みの私たちにも、赤ちゃんが与えられたのでした。

それからしばらくして、もう一つの問題が浮き彫りになってきました。それは主に主人の仕事のことでした。主人は兄弟姉妹と共に仕事をしたいという気持ちから、集会の兄弟の経営する会社へ就職していました。パソコンの仕事が専門でしたが、結婚してしばらくすると、パソコンの仕事よりも、ドイツパンの店にかかわる仕事がメインになりました。

主人は、イエス様から与えられた仕事を兄弟姉妹と共に喜んでしたいと話し、必要とされる仕事はできるかぎり引き受けていました。私も、主人が与えられた仕事をイエス様から受け取って喜んで働いているのは、ほんとうに感謝なことだと思っていました。

二女のまことを妊娠した頃、主人は土日も仕事をし、集会にはあまり集わなくなっていました。メッセージ当番で地方の集会へ行くときやキャンプには休みをとって参加しましたが、普段の礼拝のときは私と子どもだけで集会に集うことが多くなっていました。主人の両親である和田兄姉は、主人が第一としているのがイエス様ではなく仕事になっている様子を見てとても心配し、祈りつつ、その状態がイエスさまのみこころから離れていることを何度も伝えようとしていました。そして、両親に従いなさいというみことばもたびたび語られました。

子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。…「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする。」という約束です。
（エペソ　6・1〜2）

主人は、イエス様から離れているつもりはなく、何度説明しても自分の気持ちが理解されないと悩んでいました。私も、イエス様から与えられた仕事を喜んでしているのに、なぜ心配されなくてはいけないのか理解できませんでした。それに、「人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる」と聖書に書いてあるのだから、結婚したらその進退をきめるのは夫婦ではないか、なぜ主人の両親は結婚したあとも従うように要求するのだろう、と思いました。主人は悩んでいることを全部話してくれましたので、私は主人に味方し、きっと両親の和田兄姉はなにか誤解しているのだろう、そのときが来ればイエス様が明らかにしてくださるでしょうから、待ちましょうと話しました。ただ、万が一私たちが間違っていることもあるかもしれないから、イエスさまに教えてくださいと祈っていようと話していました。

主人と主人の両親との溝が深まってくると、かえって主人との関係が穏やかになるようにも感じたので、私は主人と主人の両親との間にできた溝についてはあまり痛みを感じていませんでした。

後になって知ったのですが、このような状態にあった私たち夫婦のために多くの兄弟姉妹が心配して祈ってくださっていたのでした。ほんとうに感謝です。

次女まことの出産が近づき、二〇〇五年の八月、私は里帰り出産するため日立の実家へ行くことになりました。移動のための行き帰り、主人の母であるヒロ子お母さんが同行してくださり、車の中でお母さんと主人との交わりがありました。その交わりのあとで、主人はベック兄と交わることを示され、御代田にいらっしゃったベック兄をひとりで訪ねてお交わりをいただきました

私はめぐみとともに実家に残っていたので、主人から電話でその一部始終を聞くことになりました。

ベック兄はひとこと、「両親しか心配して言ってくれる人はいないよ」と主人に話してくださったそうです。結局、私たち夫婦に与えられた祈りの答えは、主人の両親が何度も私たちに語っていた「両親に従いなさい」というみことばでした。この答えは私にとってたいへんショックでした。子どもは結婚したら独立するのだから、「両親に従いなさい」というみことばは結婚前の子どもにのみ適用されるものだと思っていたのに、イエス様のみこころは結婚した後もこのみことばに従うことだったのです。

退職の日は九月二十日に決まりました。十月にはドイツキャンプが予定されていました。ベック兄は、退職したあとドイツキャンプへ行くことを主人に勧めてくださいました。飛行機のチケットもすぐに手配されて、主人のドイツ行きはあっという間に決まりました。主人の回復のため、できるだけ交わりの中にいられるように、キャンプの前後あわせて一か月近く主人はドイツで過ごすことになりました。

二人目が生まれてこれから収入が必要というときに主人の退職が決まるのも不安でしたが、もしこれがイエス様の導きなら必要な仕事がまた与えられるだろうと思い、そのことについてはそれほどパニックになりませんでした。これもイエス様の守りだったと思います。

しかし、どうしても私の心がおさまらなかったのは主人のドイツ行きの話でした。めぐみの出産のときはあまり共に過ごすことができなかったので、今度の出産ではいっしょに日立で過ごしてもらえるだろうと私は期待していました。ところが予約した出発日は出産予定日よりも早く、このことに私は腹を立てました。私の出産のことはどうでもよく扱われているようで、気持ちがおさまりませんでした。でも、もし私が主人のドイツ行きに反対して、そのせいで主人がドイツ行きをキャンセルしたらどうなるのでしょう。主人のドイツ行きを快く思っていないことが主人の両親やベック兄に知られたら、私まで祈りの課題になってしまうではないか、と思いました。それで、我慢して、ドイツに行ってもいいよ、と言ったのですが、だんだん我慢ができなくなってきました。

実際のところ、私は実家で過ごしていて手も足りているのだし、物理的に困ることはなにもなかったのです。むしろ今回は主人がどうしてもドイツに行かなくてはいけないように感じていました。そして、私は快く主人を送り出さなくてはならないとも思いました。でも、頭でわかっていても、自分の気持ちをどうしても抑えられませんでした。

主人はこのとき、誠意を尽くしてきた職場を急に離れることになり、共に働いてきた人達の気持ちを思って大変苦しい思いをしていたのですが、私はその痛みについて考えることができず、自分の心配ばかりをしていました。

しかし、私の気持ちとは無関係にイエス様のご計画は最善でした。二女のまことは予定日より一〇日はやく、主人の退職の日、九月二十日の夜に生まれました。主人は退職と同時に日立へ来てまことと対面し、それからドイツへ旅立つことができたのです。まことの名前も、めぐみのときと同じように結婚式のときのみことばからいただきました。

主人はドイツへ行ってからもときどき電話で連絡をくれました。その電話から、主人が兄弟姉妹との交わりを通して悔い改めが与えられ、日増しに元気になっていくのがわかりました。それとは反対に、私は釈然としない気持が続いていました。

あるとき、実家の両親と共に聖書を読んでいました。次のみことばが目にとまりました。

自分の父をあざけり、母への従順をさげすむ目は、
谷の烏にえぐりとられ、わしの子に食われる。
（箴言　30・17）

私がこのとき抱いていた気持ちは、まさに、両親への従順をさげすむ目でした。私は主人と主人の両親との間に溝があるときに喜び、いま主人と両親が一つになったのを喜んでいない。この思いは、谷の烏にえぐりとられなければならないほど、主の目から見て忌まわしいものなのだと知らされました。

「人はその父と母を離れて二人は一心同体となる」というみことばも、私はまったくはき違えて解釈していたのかも知れない、と思いました。「両親に従いなさい」というみことばは、結婚したら従わなくてよいみことばではなかったのです。

このみことばが示されてから、主人の両親に、私にも悔い改めが与えられたことをお話し、謝ることができました。

このようにして二人とも悔い改めが与えられて、新しく東京の生活が始まりました。主人の新しい職場もふしぎな導きで与えられました。

和田亮子

さて、主人と主人の両親との関係が回復され、仕事のことが一段落すると、その次は夫婦の関係の問題と真正面から向きあわなければならなくなりました。

この頃のめぐみは、自我も出てきて、わがままを摘み取っていかなければならない時期にきていました。そのことに気がついた主人の両親は、めぐみのために祈り、その自我とたたかうように勧めてくださっていました。主人はその勧めの通り、子どものことを真剣に考え、子どもが従順を学ぶことができるようにとても注意を払っていました。しかし、私は、自分のしつけの不足を指摘されているように受け取ってしまいました。

それに、その厳しさに従うのは私にとってとても耐えがたいものでした。そのため、主に子どもをどう取り扱うかをめぐって夫婦の問題はより悪い方向へ向かって行き、主人との会話はとても難しくなっていきました。

次の年には、主人の兄夫婦である宗勝兄、まどか姉妹の婚約式がドイツで、さらに翌年五月には結婚式が御代田で行われました。主人に対するわだかまりを抱えたままの私は、手放しで兄夫婦の結婚を喜ぶことができませんでした。いまではほんとうに申し訳なかったと思います。

主人に従おうとして我慢していた思いは主人に対する敵対心に変わっていきました。とうとうこの敵対心は爆発してしまい、あるささいな会話から、子どもがいる前で私は泣き出してしまいました。このときは本当になにもかも置いて家を出ていきたい気持ちでした。めぐみも不安になって泣き出してしまいました。そのあと主人のほうから謝ってくれたのですが、私の心の中では、主人に言われておもしろくなかった言葉が蓄積されて、絶えず思い出され、止めようにも止められなくなっていました。こんな思いを持ったままではいずれ離婚になってしまう。離婚

届の理由に「性格の不一致」とよく書かれるのは、きっとこういういきさつなんだろうなと思いました。でももしそうなったら、結婚式で親族や友人、兄弟姉妹にあかししたことはみなうそになってしまいます。私は大勢の前でうそをついた大うそつきだと思いました。両親が結婚に反対したとき従わなかったのがいけなかったのだろうかとまで思いました。台所でひとりすわりこんで泣いていたこともありました。

ちょうどその頃、火曜日の学びのメッセージでは、御霊が私たちのうちにおられる、ということがくりかえし語られていました。「聖書には確かにこう書いてあるけれど、私のうちに御霊がおられるとはとても信じられません」と祈りました。

その年の暮に、義理の姉である藤田信子姉妹が我が家を訪ねてくれました。心のうちの悩みを信子姉妹に話すと、信子姉妹はじっと聞いて、ただ祈ってくれました。そのとき、「ああ、私はほんとに自分のことしか考えられない人間なんだなあ」と思いました。

このような私にも、イエス様は働いてくださいました。年があけて春先の大洗キャンプに家族で参加したときです。姉妹方との交わりのなかで、ふと気がついたのですが、ビデオに録画されていたみたいに心のなかで何度も再生されていた主人との会話の数々が、どうも正確に思い出せなくなっていたのです。どうせまたぶりかえすに違いないと思っていましたが、その後もよく思い出せません。不思議なことですが、私のなかの敵対心は消えてしまったのです。もしかして、御霊が働かれたのだろうか、と思いました。この思いはしだいに確信に変わりました。たしかに私のうちにも御霊がおられました。イエス様は私の努力によらず、御霊によって夫婦の一致を与えてくださったのです。

その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れ

ることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。（ヨハネ　14・17）

二〇〇八年十一月、三女みなが与えられました。みなの妊娠中は、切迫早産で入院することになってしまいました。めぐみとまことは主人と主人の両親、または実家の両親に預け、私は一か月半ほど病院で生活することになりました。私の仕事がすべて周囲の家族にふりわけられることになり、ほんとうに主人も双方の両親とも大変だったと思います。

私は入院中、いままで勧められてもなかなか読むことのできなかった聖書のメッセージの本を読むようになりました。そのなかで、「キリストの御霊にとどまる」ということについて学んだ本がありました。その本を通して、イエス様を紹介することも、子育ても、すべてが御霊の実でなければならないことが示されました。同じものを自分の努力で作り出そうとしても、それは主の前には受け入れられないのだと知りました。

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。（ヨハネ　15・4）

御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。（ガラテヤ　5・22〜23）

三女みなは小さめでしたが健康でまもられて生まれてきました。結婚式のときのみことばから、「主の御名」ということばの「みな」をとってひらがなで名前が決まりました。無事出産を終えて退院すると、再び、子どものしつけでどのように主人に従うか、が課題となりました。しかし、こんどは、子育ても、従うことも、御霊の実であってほしいという願いがありました。主人の対応で自分には受け入れられないことがあると、「私にはこれが必要とされるのでしたらさせてください」と祈りました。すると、主人は、「すべて同じやり方でなくていいよ。思いが同じなら夫婦で方法が違うことがあってもいいと思う。あなただって子どもが謝るのを拒否していたらそれは放っておかないでしょう」と言ってくれました。主人のこの一言でとても気持ちが楽になりました。

子どもたちが権威に従わないことに主人は厳しく対処しますが、ごめんなさいを言ったあとは、子どもたちに赦されたことを知らせるのも忘れません。子どもたちはパパと過ごすお休みの日をとても楽しみにしています。子育てが自我の戦いであることを主人の両親が伝えてくださったことは、当初はすなおに受けることができなかったのですが、いまでは、あのときに軌道修正できてほんとうによかったと、感謝しています。

もう一つ、イエス様と私の間に交わりの妨げになっている、解決の必要な問題がありました。それはときどき過去の自分の過ちが急に思い出されて、ほんとうに赦されているのかどうか不安になることでした。私は結婚前に勤めていた学校で、仕事上のミスをして、何人かの先生方に損害を与えていました。このことを思い返すと、償いが必要なのではないか、一人ひとりに連絡をとってお詫びを言わなくてはならないのではないか、そうしないとイエス様に受け入れられないのではないか、赦されたと思っていることはひとりよがりで、実は赦されてはいないのではないか、さらには、じぶんは救われていると思い

られた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。（ローマ　5・9〜11）

主人が転職した頃からだと思いますが、なぜか、兄弟姉妹と一つになりたいという思いが与えられ、そのようにイエス様にお願いするようになりました。漠然としていたこの思いは、いまになってもっとはっきりしてきました。特に、救われてほしい人のために祈るとき、イエス様をお伝えしたい人のために祈るとき、兄弟姉妹が共に祈ってくださるとほんとうにイエス様が働いてくださいます。また、祈られてこんでいるだけで実は救われていないのではないかとまで思い詰めてしまい、もし救われていないなら祈ってもきかれない、イエス様との交わりもできないのだと絶望的な気持ちになってしまいます。あまりにもつらくなって主人に話すと、「それはサタンの声だよ」と言われました。その声に従ってイエス様に救われていることを疑うなら、イエス様に対して罪を犯すことになるよ、と教えてくれました。確かに、「ほんとうに救われているのだろうか」という疑いは、創世記で蛇がエバに「神はほんとうに言われたのですか」と尋ねたその言葉とそっくりです。そうだ、私の罪、過ちはイエス様の十字架の血潮によって赦されていたのです。みことばにそう書かれているのだからこれは事実です。そう思ったとき、心を締め付けていた苦しい思いは去っていきました。

ですから、今すでにキリストの血によって義と認めいた人が導かれるときは、交わり手が備えられます。兄弟姉妹が一つの主のからだであるとはなんとすばらしいのだろうとそのたびに思わされます。

あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。（1コリント　12・27）

御子はそのからだである教会のかしらです。

（コロサイ　1・18）

家族も、御霊の働きによって一つにされることがイエス様のみこころなのだと思わされています。

いまは、主人と結婚できてほんとうによかったとイエス様に感謝しています。意識して共に祈る時間を作らないとすぐ忙しさに流されてしまうような夫婦ですが、イエス様が祈る時を与えてくださって、ともにお互いの課題を祈りあう恵みをいただいています。夫婦で共にイエス様により頼むことができるのは本当に感謝です。

もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。

（ローマ　8・11）

和田亮子
成沢小学校、多賀中学校、日立第一高等学校、富山大学人文学部卒、夫・周作

主よみもとに近づかん

田中 美智子



姉（左）、妹（右）といっしょに



夫の宏道さんと

救われた時のこと

やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。

（イザヤ　9・2）

私は、この聖書のみことばのようにしてイエス様に出会いました。無我夢中の子育てに一息ついた頃、かなり衝撃的に、「私は生きてはいても、実際は死んでいる。これからどうやって生きていけるのだろう」という思いがおそってきました。この魂の叫びは、振り返ってみると、若い頃から心の奥にあったのですが、その都度、折り合いをつけていました。しかし、この時ばかりは完全にいきづまり、今までのやり方ではどうにもならず、ただ膝を抱えてうずくまってしまいました。四方は高い壁に取り囲まれて、身動きができず、ただ天に向けて上方だけが空いている感じでした。そんな状況が続いていたある日、そんな私の惨めさに気づいた姉は、キリスト集会が開いていた軽井沢のバイブルキャンプに誘ってくれました。ちょうど姉は教会から集会に移った頃で、それまでとは違う姉の変化に私も気がついていました。

闇の中にいた私は、「光」には敏感だったのでしょう。姉には私にないものがある、私もそれが欲しいと思い始めた、まさにグッドタイミングでありました。今から三十年前、ちょうど四十歳の時でした。キャンプ場に足を踏み入れてみて心の居場所を見つけたような安堵感を覚えました。

その頃、ある問題を抱えていた私は、集会の方に次の質問をしました。「この世には正義はあるのでしょうか?」世間でこんな質問が許されるのは、せいぜい学生位迄でしょうが、そこの雰囲気にあって素直になれたのです。その方は、「ある」とも「無い」とも言われず、ただ、「神の義はこの世の義とは違います」と言われました。その瞬間、神にふれたというか、「私とまったく次元の異なる高い次元におられる方がいる！」と思いました。それと同時に自分が小さく恥ずかしく思えました。ほんとうの意味で、この質問に答えることのできる方は、唯一創造主しかないと後で分かりました。私は勇気を出してその時祈りました。声に出して自分の言葉で祈った人生初めての祈りでした。「もし神様がおられるのなら、これからはあなたの道に生かしてください。お願いします」神様は、そんな私を待っていたかのように喜んで受け入れてくださり。救ってくださいました。

あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。

（1ペテロ　2・25）

それまでの漫然とした神意識は、救い主イエス様に出会いはっきりとしたものになりました。「人の心には神の形をした空洞がある」ということばがあるそうですが、まさしく死んでいた魂が神の新しいいのちにあって生き返った喜びはことばに表わすことができません。創り主から離れて生きる重圧がこれほどのものであったかと、それが取り除かれてみて初めて実感した次第です。

神の御子のイエス様が自ら犠牲になって、神と人との和解の道そのものとなってくださったことを心から感謝します。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

その後、苦しい事、悲しい事など、数々ありましたけれど、あの日以来、虚しいという思いになったことは一度もないのに、最近気づいて感無量になりました。

信仰の試練

救われて後、天と地が入れ代わったように、価値観が百八十度変わりました。主に喜んでもらいたい、みこころに従いたい…、それが私の第一の願いになりました。しかし、「だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。（ピリピ　2・21）」のみことばのごとく、現実の歩みは自分の願いや思いに捕われ、主に委ねても委ねきれず、主に信頼すると言いながら手を離せず、惨めな失敗と敗北が連綿と続くばかりでした。首まで水に浸かって身動きがとれない状態で、主なる神は私の願う事と逆の事をなさる恐ろしい方のようにさえ思えました。悲しむ心を慰めるなんらの優しい御声も聞こえませんでした。ヨブの血を吐くような叫びがとても共感でき慰められました。

自分の願いが一番執着するのは、家族の救いであり、とりわけ夫の救いでした。子供たちはまだ小学生の頃でしたが、大変そうなお母さんと大好きなお父さんとの間で、心を痛め、健気にも気遣いをしてくれました。しかし、この点を通して、私は一番試みられました。「何と惨めな信者なのだろう。私にあるのは恥だけです。主イエス様が私の問題点を教えてください」と祈るように導かれていきました。それまで一方通行のようだった祈りが、やがて主イエス様との幸せな交わりへと変わっていきました。

患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。（ローマ　5・3、4）

娘たちがいつの日か壁にぶつかる時が来たら、諦めないでほしい、真の脱出の道があることを知っておいてほしい、とのあの頃の私の切なる願いを主は憐れんで受け取って下さっていますから感謝します。

この度の病気を通して

昨年、悪性リンパ腫の病いが与えられたことは、私にとって大きな恵み、祝福です。この病いがなかったら知り得なかった多くの事を知ることができました。近くの医院で検査しても原因が分からない熱が次第に高くなり、四十度になった頃には、そろそろイエス様のところに行く時が来たかなと思いました。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。（イザヤ　43・4）

そんな時に、イエス様がこのみことばをもって御声をかけてくださいました。その優しさにふれ、それまでこらえていた涙がせきを切ったように流れ、いつまでも止まりませんでした。

翌日、近くの医院の紹介状を携えて総合病院へ入院するつもりで、力をふりしぼって荷物をまとめて出かけましたが、満床ということで断られた時は、呆然自失の状態でした。外は寒く真っ暗で、家に帰る気力も体力もありませんでした。しばらく横になって休んでいるうちに熱も上がってきました。いっしょに付き添ってくれていた主にある姉妹は、大丈夫、きっと入院できると励ましてくれました。

途方に暮れていた私の思いとは裏はらに、彼女が言っていてように段々と事が動き出しました。「明日入院して来る方のベッドが今晩だけ空いていますから」と言われた時は、本当に有難かったです。氷枕を出して頂いて、不安の中ではありましたが、疲れ切っていましたので、ぐっすり眠ることができました。そして翌日昼頃にはベッドを空けなければならないのかと思案していると、さらに驚くことには、「個室ですけど一つ空いたので、そちらへ…」と。こんなふうに主なる神様の手の内に取り扱われ運ばれていきました。最終的に血液内科のベッドにたどり着くまで何回も病室が変わるスリル満点の一ヶ月でしたが、退院するまでの二ヶ月間、すべてに主のお働きを覚えさせて頂く日々でした。

入院しても私にふさわしい抗ガン剤がなかなか見つけられず、三十九度、四十度の熱が来る日も来る日も続き、氷で頭と脇とそけい部を冷やしたり、日に三度の解熱剤を使う、熱との戦いの毎日でした。そんななか、主イエス様はいつでも私のすぐ近くに、息の届くところよりも近くにいてくださることが確信され、私は母のふところに抱かれた幼子のようにただただ主に甘えていました。その間、地上の思い煩いからはまったく遮断され、ひたすら主イエス様のご愛の内に置かれていました。甘えるのが苦手な私ですが、そんなふうに甘える私を主はとても喜んでくださるのが、また私は嬉しいのです。

そんななか、次の体験は終生忘れ得ません。果てしなく続く熱に身体は消耗しきってしまい、「イエス様。つらい！」とつぶやいた時、主は私の心に「わかっているよ。わが子よ」と優しく語りかけてくださったのです。身体は火の玉でしたが、私にはそのおことばで十分でした。布団をかぶって泣きました。主なる神が覚えていてくださる…、これ以上の慰めはありません。

次のみことばは入院する数日前に語ってくださったのですが、このみことばはその後の病室での体験となりました。

主に愛されている者。彼は安らかに、主のそばに住まい、主はいつまでも彼をかばう。彼が主の肩の間に住むかのように。（申命記　33・12）

…次のメモは退院後、抗ガン剤治療に通院していた頃、病院の待合室で書き留めたものです。

「『荒野でぶどう畑を見い出す。』―と主は不思議なことをおしゃいましたが、あなたがともにいてくださる病室は、ぶどう畑のように麗しかったです。この世をただ神様に希望をおいて生きています。私の望みは、ただあなたにあります。神様は私の喜びであり、慰めであり、力であるからです。私の目的そのもの、すべてであるからです。あなたは私の必要を、渇望を完全に満たしてくださる神です。この病いを通して、あなたが生けるまことの神であることが、さらに深く私の現実となりました。創造主なる方、救い主なる方に、私はこんなにも愛されていたことに改めて気づかされ、『自分が、自分が』と

言う者が、主の愛の内にとけてなくなっていきます」

ただ主のみこころがなるようにと願っていましたから、病気に関しては、何の思い煩いもなく、全面的に病院にお任せしました。入院中、妹が病室で次のように祈ってくれました。「身体は大嵐で火の玉だけれど、それにかかわりなくイエス様のなかにチッポ（私のこと）が安心して休むところがあるから感謝します。アーメン」

無条件に、そしてひたすら主に信頼し、寄りかかり、神の安息のなかに置かれていたのでした。まったく無力の極限状態でのことですから、主なる神の栄えあるみわざという他はありません。貴重な体験を心から感謝します。

主よ。あなたは私のちっぽけな願いをはるかに越えて、私の祈りに応えてくださいました。自分でもそれと気づいていなかった魂の叫びにも似た祈りを捕らえてくださいました。あなたの愛の高さ、深さ、広さに圧倒されます。私は、岩からいのちの水を出される義のお方を何と小さく見積もっていたことでしょう。私は、「知識もなくて、摂理をおおい隠した者（ヨブ　42・3）」でした。

主のみことばは蜜のようで、喜びと元気を与えてくださいます。「愛は多くの罪をおおうからです。（1ペテロ　4・8）」というみことばの意味がようやくはっきり分かりました。人は神の愛に十分に満たされて初めて充足し、すべてを受け入れることができるものと知りました。

イエス様を喜ぶ喜びと、イエス様が喜んでくださる喜びとが、聖霊の翼にのって行ったり来たりする思いがします。

退院してから今日に至るまでのこの一年間は家族の優しさ、ありがたさを味わせていただく一年間でもありました。本当にありがとう。イエス様は、家族の結びつきを大切なものと見なしてくださり、「わたしはここにいる」とおっしゃってくださいますから、理屈抜きに感謝をしています。

主の祝福は川のように流れて広く潤してくださいます。姉と妹と主にある姉妹になったことを喜び合って歩んできましたが、この病気を通して、主は三人を神の愛の絆で固く結び直してくださいました！これにまさる喜びはありません。主のなさることは何と優しく麗しいことでしょう。間違いだらけの信仰の歩みだったと思いますが、それでも、私にはイエス様がすべてでした。

次のみことばは入院中ずっと心のベースに響いていたみことばです。

この地上を、信仰を持って歩み通したいと心から願っています。主イエス様が「よくやった」と御国に呼んでくださる時が私にとって完成の時です。

（ヘブル　13・14）

私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのです。

（ヘブル　12・2）

イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。

（1コリント　2・9）

田中美智子（たなかみちこ）
一九三九年東京都生まれ。大正小、桜蔭中、桜蔭高卒。
夫・宏道、長女・万葉、次女・華林、三女・美麗

こどもと若者の証し



狩俣優太くんの証し



ぼくは、この「あかし」を書く時、家族に祈ってもらい、御代田に来る直前に書き上げました。ぼくは、ご飯の前や、寝る前、時には、なくした物を探している時などに、必ずではないけどお祈りをします。お祈りすると、良いことを神様がしてくれると思います。

ある時、なくし物をして、お祈りをしたら、出てきた経験があります。そして、「神様ってすごいな～」と思いました。

他にも、寝る前に、「楽しい夢が見られますようにお願いします」と祈ったら、楽しい夢が見られたりしました。ぼくは、イエス様を信じ続けたいと思います。

暗唱聖句

ハレルヤ。天において主をほめたたえよ。いと高き所で主をほめたたえよ。（詩篇　148・1）

狩俣優太

二〇〇一年　東京生まれ。西東京市立上向台小学校四年在学中。趣味：絵をかくこと、物づくり。すきなもの：恐竜、動物、電車

中山ひとみさんの証し



妹さんといっしょに

吉祥寺集会に集っています中山ひとみです。

今日は、この場でおはなしをする機会が与えられました。

今、人間のでき方についての世の中で一番有力な考え方は、きっと進化論だと思います。

でも、イエス様を信じるわたしたちは、そう考えません。なぜなら聖書にはそのようなことは書いていないからです。聖書にはこう書いてあります。

私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。

（エペソ　2・10）

このみことばを読むと、神様はわたしたちをひとりひとり作品として造ってくださったことがわかります。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。

（伝道者　12・1）

わたしたちは、わたしたちの創造者であり、救い主である神様・イエス様を信じています。イエス様を信じるだけで、天国に行けるというめぐみをくださったイエス様以外の神様はいません。イエス様だけが、わたしたちの神様です。

最後に、わたしの好きなみことばを読んで終わろうと思います。

私たちはみな、ただひとりの父を持っているではないか。ただひとりの神が、私たちを創造したではないか。

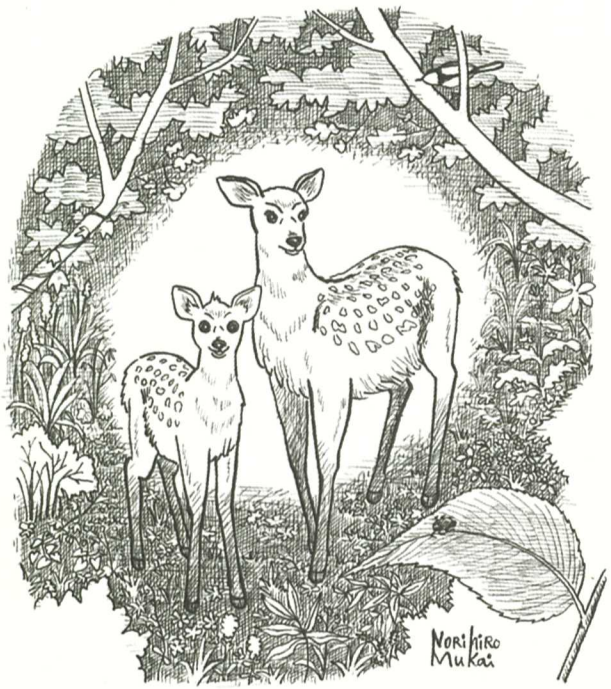
（マラキ書　2・10）

ありがとうございました。

中山　ひとみ

一九九八年東京都生まれ。

明星学園小学校六年在学中。



久保はんなさんの証し



家族とともに

私はクリスチャンホームに生まれ、小さいときから集会に集っていました。クリスチャンホームに生まれてきたことの幸せを実感しています。

私には、その幸せを実感した経験があります。その経験とは、学校の友達関係のことです。私は、学校でいじわるをされ、泣いて帰ったことがありました。そんなとき、いつも頼れるのはイエス様です。毎日母と祈り、イエス様に助けてもらいました。そして、いじわるされることもなくなり、友達関係もよくなりました。また、その後、転校することが決まったときも同様に、毎日、たくさん友達ができるように祈っていました。すると、私も新しい学校の友達もお互いに心が通じ合うようになり、新しい友達といい関係を結ぶことができました。たとえ、友達のことで悩んでいても、イエス様はいつも一緒にいてくださいます。

このように、私にとってとてもつらいことがあっても、それを解決してくださるイエス様の愛をもっと知りたいと思います。まだイエス様に助けられた経験は少ないですが、これからもっと大きな悩みをかかえたときも、一緒にいてくださるイエス様が祈りを聞いてくださると信じたいです。

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。

（ヘブル　13・5）

久保はんな
一九九九年生まれ。
西東京市立上向台小学校六年在学中。



松元ふみ姉妹の証し


兄とともに

こんにちは。吉祥寺集会に集っている中学三年生の松元ふみです。これから、イエスさまが私に働いて下さったことを紹介したいと思います。

まずはじめは、生徒会選挙のことです。私は小学生の時から、人前でしゃべるのが苦手でした。中一の夏の頃までは、生徒会役員の先輩に憧れてはいたものの、自分が立候補するなんて思ってもいませんでした。しかし、二学期になってから、イエスさまは私に、「立候補しなさい」と言っている気がしました。私の心の中では、「全校生徒の前で演説するなんて絶対無理だし、生徒会活動を理由に部活もあまり出られなくなって、友達との仲も悪くなってしまうのではないか」などと、立候補したくない思いがほぼ一〇〇パーセントでした。それでも、祈っていたら、兄と母にも説得され、立候補しました。思っていた通り、部活で同学年ただ一人の子にひどく冷たくされ、演説会では声や足が震えてかなり緊張しました。でも、イエスさまは当選させて下さいました。

生徒会執行部のメンバーは、変わった人ばかりでしたが、みんなとても優しくて、生徒会活動は私にとってなくてはならないものになりました。生徒会室にいるだけで、いろんなストレスが解消されて行きました。どんな雑用の仕事を任されても、全く苦ではありませんでした。また、苦手だった人前で話すことも少し慣れて来ました。イエスさまは、生徒会役員選挙を通して、私に多くの平安と喜びをもたらして下さいました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行なわれるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。（伝道者　3・11）

次に、部活についてです。私は、バスケット部に所属していました。わたしの学年で女子は二人しか入部しませんでした。もう一人の子は、私よりバスケが上手で、とても気が強い子でした。毎日、睨まれたり、舌打ちをされたり、怒鳴られたり、耳元でコソコソ非難されたり、本当に部活が苦でした。でも、言われることは、「パスが弱い」とか「同じ技で抜かれ過ぎ」とか、全部あたっていました。だから、言い返すことができなくて、どんどん追い詰められました。祈っても、イエスさまに届いているか、不安になる日はしょっちゅうでした。二年生の冬、大会がありました。私のチームは弱小チームですが、その大会にはどうしても勝ちたいという思いがありました。祈っていたら、大会前日にこんな御言葉をいただきました。

強く、雄々しく、事を成し遂げなさい。恐れてはならない。おののいてはならない。神である主、私の神が、あなたとともにおられるのだから――。主は、あなたを見放さず、あなたを見捨てず、主の宮の奉仕のすべての仕事を完成させてくださる。（1歴代誌　28・20）

そして、一回戦を一点差で勝つことができました。試合終了のブザーが鳴った時、イエスさまが私の祈

りを聞いて下さり、御言葉の通りに私を見捨てず、すべての仕事を完成させて下さったことに自然と涙が溢れて来ました。その時、心からイエスさまに感謝する事ができました。

部活を引退し、今思うと、同学年の子に毎日キレられる練習が苦であったことも、イエスさまのご計画のうちであり、私自身がその子を裁いていたことに気づかされました。その子が下手くそな私に注意してくれなかったら、試合に勝つことはできなかったと思います。背後にはイエス様がいて、私にバスケの楽しさや喜びを味わわせて下さったのです。それなのに私は、ずっとその子のことを「一度でいいから、仕返ししたい」、「人を傷つけることしかできないなんて可哀相な人」などと思っていました。今も心からその子とは仲良くできません。ただ、その子の救いを真剣に祈ることができるように、私自身が変えられるように祈っています。

最後に、お友だちのA子ちゃんという姉妹を通してのことです。A子ちゃんは、小さい時から肺と心臓の病気でした。もう長くは生きられないくらい重い病気でした。私は、小学六年生の頃からA子ちゃんと文通するようになりました。苦しい病の中にあっても、私が手紙を書くと、毎回きれいな字でお返事をくれました。その内容に、私は励まされました。私の悩みもすべて祈ってくれました。二通紹介したいと思います。

「ふみちゃんへ。お手紙ありがとう。私は毎日体調がコロコロ変わるけれど、落ち着いている方です。苦しくなる時も、悲しくなる時もあるけれど、目にはみえないけれど、人と違ってえこひいきなく私を愛して、そばにいて、心のすべてを正直に話せる方を知っていることは大きな支えだと思う。ふみちゃんの方は、中学はどう？楽しい？またいっぱい聞かせてね。

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる。『恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。

わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。わたしは、エジプトをあなたの身代金とし、クシュとセバをあなたの代わりとする。わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。』（イザヤ43・1～4）　A子」

つぎは、例の生徒会選挙について書いた時のお返事です。

「ふみちゃんへ。この間はお手紙ありがとう。ふみちゃんからお手紙をもらう前に、お母さんが弟の中学のプリントを見せてくれて、『ふみちゃん、すごいね。結構、活動的なんだね』などと話しこんでいました。だから、手紙を読んで、いろいろ悩みながら、祈りながらだったんだぁと分かったよ。すごいね。たくさん祈っていたんだぁ。私は前に出て話したりするの、すごく緊張しちゃうし、嫌いで、全然出来ないんだけど、ふみちゃんはそういうの大丈夫なの？生徒会って、全生徒の前で話したりするんでしょ？

私はやっぱり、なかなか学校に行けないし、行けてもすぐに疲れちゃうから、少ししかいられないんだ。あまりにもちょっとしたことで疲れる、弱い体だな・・・と思って、悲しくなったり、三年前はこんなじゃなかったのにって昔と比べたり、色々なことですぐに落ち込んじゃうんだけど、『何も思い煩わないで・・・（ピリピ4・6～7）』って御言葉の通り、感謝を忘れないで、苦しい時はイエスさまに話しながら、平安や喜びを受けられればいいなと思う。もっと辛

い人もいるし、悲しんでいても何も変わらなくて、暗くなる一方だし、天国までできるだけ、イエスさまに喜んでもらえる生活をしたいと思うよね。A子」

A子ちゃんは、二〇〇九年の四月に召されました。今でも、辛くなったときなどに手紙を読むと、多くの御言葉と愛にあふれるアドバイスに慰められます。イエスさまは、A子ちゃんとの手紙でも、私を支えて下さいました。また、天国でA子ちゃんと再会できると思うと、とても楽しみです。イエスさまは、傲慢で何でもじぶんの力や努力で事をしてしまったり、人を裁いてしまったりする私の罪のために十字架について死んでくださり、よみがえってくださり、今もなお、私を愛し続けてくださっています。その愛によって、私は慰められて恵みを頂くことができ、最善の道へと導かれているので本当に感謝です。

今、私は受験生で、やっぱり自分で努力して成績をあげようと必死になってしまいます。そして、勝手に自分で自分を追い詰めて霊の目を閉じてしまうのです。・・・そうではなくて、ただ御心の高校に行けるように祈って信じて行きたいと思います。

キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。（2コリント　5・15）

主を呼び求める者すべて、まことをもって主を呼び求める者すべてに主は近くあられる。（詩篇　145・18）

ありがとうございました。

松元　ふみ

一九九五年東京生まれ。武蔵野市立第一中学校三年在学中。父・毅、母・夏芽

酒井歩実姉妹の証し



家族でいっしょに、前列中央、歩実さん

私は五人家族の末っ子としてクリスチャンホームに生まれました。生まれた時から私の家では神様が中心となっていましたので、幼いころから神様の話を聞いて育ちました。ご飯の前はお祈りをして、日曜日は礼拝へ、夏休みや冬休みはキャンプへということが習慣となっていました。そのようなことに対して疑問を抱いたことはなく、神様を信じていました。普段の礼拝には同い年の子がおらず、小学生の時などはキャンプに行っても、本当に特定の子としか話すことができませんでしたが、中学生になり夏の中高生キャンプを通し多くの姉妹と知り合うことができ、キャンプが楽しみの一つとなりました。神様の導きにより二〇〇五年のバンクーバーのキャンプに母と兄と集うことができました。そこでのお交わりの中で、「自分は神様を信じきっていない」と言いました。しかしその夜ベッドの中で、信じきっていないと言ったことをとても後悔しました。神様はその次の日から本当に多くの恵みを与えてくださいました。キャンプの中で「わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい

去った。」（イザヤ　44・22）というみことばが与えられ、神様にごめんなさいということができました。すごく感謝なキャンプでした。それからは家庭集会などにも集いたいという思いが与えられ、時間のある時は少し遠くても行くようになりました。そういったことを通し、多くの兄弟姉妹と知り合うことができ、以前にもまして御代田などのキャンプに集うことが楽しみになりました。

夏のキャンプでは、小さいころから証しを聞いていました。聞きながら私がよく思っていたことは、恋愛のことで試練が与えられるのは嫌だな、ということでした。それは、昔から恋をしたりすることにあこがれていたからでした。イエス様はそのことも全てご存じで高校に入った時に試練を与えられました。

高校に入学して好きな人ができ、付き合うことになりました。本当に大好きで、日々の生活の中心が彼になっていきました。一度彼とは別れなくてはいけないのでは…と、母の心配そうな言動からそう感じたことがありましたが、その時は別れたくないと彼に泣きながら話し、そのままで終わりました。本当に彼が好きで、彼さえいれば何もいらないと思っていました。彼が自分の中で偶像になっていたことに気がつきませんでした。ある時お交わりを通し、そのことがはっきりと示されました。またその日のうちに神様は、ある姉妹から貸していただいた本を通し、私の抱いていた疑問に対するこたえを示してくださいました。その本はクリスチャンの人の恋愛について書いてある本だったのですが、神様からのこたえはその時の私にとってはとても辛いものでした。三日かけて半分ほど読み、彼と別れなくては神さまを第一にできないということをはっきりと示されました。私の内にある自我はそんなの嫌だと言い張りましたが、しかし、今は時ではない、と神様ははっきりと私に語りかけているようでした。その晩は涙が止まらず、

ひどく怖くなり、母のもとへ行き聖書を読んで共に祈りました。私の自我はかたくなで、ただひたすら別れたくないと泣くばかりでした。その時に母から、「この気持ちも整えてください。神様のみこころのとおりになりますように」と祈ったらいいと言われ、そう祈るのもつらかったのですが、「別れたくありません。でも神さまがそうしないさいって言うならこの気持ちを整えてください」と祈りました。

父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。　（ルカ　22・42）

祈り終わると、本当に不思議でしたが、ずっと心の中にあった重荷がフワっとどこかへ飛んで行ったようでした。そして別れる決心がつきました。次の日に彼と会い手紙を渡しました。私の中の思いはまだ消えておらず、将来もう一度会う約束をしました。それは、祈った結果ではなく私の思いでしたことでした。しかし神さまはそれを言うことを許してくださいました。そうして、最後に彼から神さまのことを教えてほしいと言われ、本当に嬉しく平安な時間を過ごすことができました。しばらくは本当に喜んでいましたが、また自分の中の自我が出てきて苦しい時もありました。周りの人をみて、どうして自分だけ…自分はすごく可哀想だ、とずっと思っていました。神さまに対して文句を言っていました。でもそんな私をいつも助けてくれるのは、神さまでした。祈るといつも心が軽くなりました。兄弟姉妹に会うと嬉しくなり、「祈っているよ」という言葉に支えられました。

主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。　（詩篇　4・8）

進路も決まり、あとは卒業するだけとなった頃に彼から連絡があり、会う機会がありました。その時にはっきりと「もう一度会う約束をしていたけど、それまで待っている自信がない」と言われました。そのことは辛いことではありましたが、もう悩まなくていいよと神さまに言われているようでホッとしました。

人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。（箴言　19・21）

今でもたまに自分の自我によって苦しくなることがあります。でも本当に助けてくださるのは神さましかいない、ということが分かったので、神さまに悩みごとをもっていけばもう大丈夫という大きな武器を手に入れることができました。

もうあなたは泣くことはない。あなたの叫び声に応じて、主は必ずあなたに恵み、それを聞かれるとすぐ、あなたに答えてくださる。たとい主があなたがたに、乏しいパンとわずかな水とを賜わっても、あなたの教師はもう隠れることなく、あなたの目はあなたの教師を見続けよう。あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。（イザヤ 30・19～21）

私には四つ上の兄がいます。昨年の春から足の病気で何度も手術をしてきました。痛みで苦しむ兄を見ることは私や家族にとっても辛いことでした。本当に祈ることしかできない、と思いました。父や母を見ていて、本当に辛そうな時もありました。しかし神さまに祈ることによって支えられ、色々な兄弟姉妹の祈りによって支えられていました。主にある家族、主にある兄弟姉妹の存在の大きさに気付かされました。私もその中にいることのできる幸せを感じます。

私は道をはずれて自分勝手に進んでしまいやすい者です。大好きなイエス様にこれからも助けていただきながら、イエス様のことを今後より多く知ることができたらいいなと思います。

私の名前の由来となったみことばは次のものです。

主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。（コロサイ　1・10）

酒井歩実

一九九一年新潟県生まれ、横浜リハビリテーション専門学校在学中。父・正人、母・美恵



須藤翼兄弟の証し



▲前列左から3人目、翼君

ぼくは小さいころからお父さんの自転車に一緒に乗せてもらって、毎日いろんな所に行かせてもらっていました。そのころの思い出といえば、ほとんどがお父さんとのことで、本当によくしてもらっていたと思います。

そのころ好きだったものは赤い車らしいです。これだけ聞くと可愛らしい子どもですが、もっと小さいころは、一緒に寝ていると突然顔やら腕やらをけってくる子だったそうです。そのせいで、お父さんとお母さんは、ぼくとの間に布団で壁を作って寝ていたという話も聞きました。

そんなのびのびとした生活を送らせてもらっていたのですが、ぼくは三歳ごろからはっきりと、「聖書の話をききたくない。お祈りもしたくない」と言っていたとお父さんたちから聞きました。その言葉をきいた両親は、きっととても悲しく、そしてさびしかったと思います。その年頃でそんなことを言う子どもは滅多にいないと思います。でも、そんなことなどまったく覚えていないぼくは、その話を初めてきいたときに両親の気持ちを考えてあげることができませんでした。

結局、そのままぼくの四歳の誕生日がだんだんと近づいていたとき、ぼくは事故にあいました。交通事故でした。お医者さんは、「本当に危険な状態で、もし助かったとしても後遺症が残るでしょう」と言っていたそうです。

今考えてみればお父さんとお母さんはとてもつらかったと思います。「イエス様はきらいだ」と言っていた我が子が、その気持ちを悔い改めないままで死んでしまうかも知れなかったからです。こうして証しをさせていただく機会をいただいてはじめて、自分がとてもおろかに感じました。

ぼくは二度手術をしたそうです。一度目は、脳内で出血があり、とても圧力が高くなっていたので、頭がい骨の一部を取りはずす手術でした。なんとか一度目の手術を終えて目を覚ましたときに、主はぼくを弱くしてくださいました。今まで主に祈ることをためらっていたぼくですが、二度目の手術の前に「守ってください」と祈って、とても心が落ち着いていたんだよ、と母が話してくれました。この原稿を書くときに、ぼくは自分の姿がイエス様を十字架につけろと言っていた人々と重なりました。イエス様を否定し、はっきりと拒んだぼくが、主の御業を目の当たりにして、自分が間違っていたと気づかされ、悔い改めることができたからです。

二度目の手術も無事成功し、ぼくは退院しました。しばらく頭に包帯を巻いていなければいけませんでしたが、苦ではありませんでした。残っている記憶も、事故前のようなはっきりとしたものはありませんが、いやな思い出はなく、ただ漠然と喜びに満たされていて、きっとそれはイエス様に祈ることで心

が楽になるのを、事故の後のぼくは感じていたからだと思います。

それからは何事もなく楽しい日々が続き、ついに小学校に入学しました。ですが、一年生ですぐに、もう一度手術をしなければいけないと言われたときは、とてもショックを受けました。あんなつらい日々とはもう無縁だと思っていたぼくにとって、それはあまりにも衝撃的でした。入院してすぐのころはとくに不安もなく、意外にも楽しい日々が続きました。病院で働くお医者さんが一緒に遊んでくれたりもしました。でも手術をした後は苦しい日々が待っていました。全身麻酔が原因で、一日に何回も吐きました。もういいだろうと思うほど何回も何回も吐きました。どうしてこんな小さい子どもが、こんなにつらい思いをしなければいけないのか、まったくわかりませんでした。ぼくはそのとき、自分が一番不幸な人間だと思いました。そんな苦しい日が何日か続きましたが、やっと吐かなくなって体調がよくなったときは、母と一緒に感謝のお祈りをしました。苦しかったけれども、なんとかここまでイエス様が守ってくださったことは、そのときでも心から感謝できました。

退院まであとわずかというときに、ぼくは病室を移されて、ぼくより二つか三つ年上の男の子と仲良くなりました。とてもよくしてくれる優しい人でした。退院してからお母さんが、「あの子は難しい病気で、何度も入退院しているんだって」と言っていました。その話を聞いたとき、ぼくはあの苦しかったときに心の中で考えたことを思い出しました。たった数ヶ月しか入院していないぼくと、何度も入退院を繰り返し、それでも病気が治らないあのお兄さんと、どちらがつらい思いをしているかなんてことは、あのころのぼくでもはっきりとわかりました。自分は全くおろかだと思わずにはいられませんでした。それまで他の人の救いを祈ったことのないぼくが初めて他人の救いを祈ったときでもありました。

三歳の事故から、ぼくはいろんなものをイエス様から与えられました。祈ること、人を思いやること、自分よりももっと辛い思いをしている人がいて、その人のために祈ろうとする心。事故や手術は苦しいものだけど、イエス様はそれ以上の恵みをぼくに与えてくださったんだと思います。

その後は順調に回復して、前と同じように生活できるようになりました。友達との時間も楽しくて、スポーツもしばらくたってから盛んにやるようになりました。中でも野球はとても熱心にしていました。今は空振りばかりしますが、昔はうまくバットにボールを当てていたらしいです。ぼくはお母さんに、野球のクラブに入りたいとねだりました。お母さんはなぜかダメだと言いました。小さいころのぼくは、理解しがたいことに何度も直面しました。このできごともその一つです。「事故で頭を手術したんだから、もしぶつかったらどうするの」と言われました。「そんなの大丈夫だよ」と言っても、母は、そして、父も断固反対でした。このとき初めて、「なぜイエス様はぼくを事故にあわせたんだろう」と思いました。事故にあわなければ大好きな野球ができたのに、そう思うと、とてもイエス様なんて信用できないと思ってしまいました。

そんな中でお父さんは、ぼくにこんなことを言いました。「もし事故にあわなかったら、翼はイエス様を信じていないかもしれないんだよ。それに野球ができないのは、それが翼の最善だからなんだよ」と。前半のことは、素直に納得できました。でも最善というのはどういうことかよくわかりませんでした。今自分のしたいことが一番よいこととは限らないと言われても、ぼくは素直に受け止めることができませんでした。でもそのほかにもできないことがたくさんあった生活とはうらはらに、学校ではたくさんの友

達に恵まれて楽しい生活を送ることができました。

小学三年生のとき、野口先生という先生に出会いました。その先生はみんなに、「三十人三十一脚をやらないか」と言いました。三十人三十一脚とは、三十人以上が足を結んで五十メートルを走ってタイムを競うというものです。まさかこんなことをやるとは思っていなくて、ぼくもクラスのみんなも興奮気味でした。ぼくはすぐにその競技に魅せられて、かなり熱心に練習に参加しました。三年生だから、他の六年生に簡単に負けてしまいましたが、また来年があるとみんなとてもはりきっていました。

一年あいだを置いて、五年生からまた練習が始まりました。ちょうどクラス換えがあり、先生も変わって少しがっかりしました。先生は梅沢先生という女の先生でした。正直なところ、野口先生のクラスがよかったのです。しかし、梅沢先生がまたすごい先生でした。五年生になって一ヶ月足らずで、みんなの人気者になって、しかも極度の負けず嫌いで、野口先生に対抗心を燃やして、その道のプロである野口先生に真っ向から勝負しようとしているようにみえました。

ぼくはリーダーに立候補をしました。三年のときのこともあって、みんなぼくに投票してくれて、リーダーになることができました。結局その年も一年間のハンデがあって、他の学校の六年生に負けてしまいましたが、二年間走ってきたという自信と、最後の一年というあせりと意気込みが、ぼくら二組だけでなく、一組にも火を付けました。そんな中でぼくはますますやる気を出して、少しいきすぎなんじゃないかと思われるほど、熱心に練習しました。そしてリーダーである責任感から、必要以上に人を責めてしまうことが多くなりました。そのぼくの姿を見て母が、「あなたがクラスの先頭に立ってみんなを引っ張るんじゃなくて、クラスの後ろで、みんなを押してあげるんだよ」と言いました。ぼくは、「わかっているよ」などと適当にあしらっていましたが、お母さんはきっと、リーダーでもみんなに対する謙虚さと思いやりがぼくに全く足りていないということを言いたかったんだと思います。

だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなのしんがりとなり、みなに仕える者となりなさい。

（マルコ　9・35）

小学校ではいろいろなことがありましたが、どんなものよりもとり分け印象的なできごとがありました。それは三十人三十一脚の大会の前の自然教室でのことです。クラスの中で深刻な問題が起こり、目前に迫っている大会までに団結が失われてしまうかもしれないような事件でした。その問題を解決するために試行錯誤する先生を見て、ぼくはとても悲しくなりました。この問題はぼくたちの年ごろの者からすれば、それほど大変なことでもないようなものだったからです。その内容は、部の人がある人達をのけ者にして、悪口を言うというものでした。でも、クラスの担任である梅沢先生にとっては、それは一大事でした。先生はなんとか自分達の力で解決するしかないんだというような、決してぼくら人間だけじゃできないようなことを、必死になって訴えていました。でもクラスのみんなは、そこまで真剣にならなくてもいいだろうと思う人も少なくありません。その視線を浴びながらみんなに語る先生をとても見ていることができませんでした。

人の力にしか頼ることのできない先生と、その先生を冷たい面持ちで見る一部の生徒の中で、ただずっと下を見て、ぼくは黙っていました。話が終わってみんなが帰ったとき、ぼくは先生と話したいことがありますと言って、ミーティングルームで話をしました。聖書の話をしました。先生は笑わずに、真剣

に聞いてくれました。今思えば、あのときのぼくはあまりに感情的すぎて、まともに言いたいことも言えていなかったけれど、それでも先生は聖書と『光よあれ』をもらってくれました。そのことを考えると、こんなささいなことで泣きじゃくって話をした自分がはずかしくなります。けれど聖書を渡せたことは、形はどうであれ、よかったと思います。

例の問題もなんとか解決して、三十人三十一脚の試合も負けはしましたが、みんなにとってとてもよい思い出になりました。そうして小学校も卒業して、あまりメンバーも変わらぬまま中学生になりました。部活はやはり野球部に関心があったのですが、その頃にはバットにかすりもしない状態でした。結局兄に教わっていたので、バドミントン部に入りました。

とてもはずかしい話ですが、ぼくは女子と話すのが苦手で、リーダーをやっていたときも、男子には快活に話せるのに、女子には無愛想になってしまいました。女子からすると、ぼくは雰囲気が恐いらしく、結果として全然話せませんでした。それでバドミントン部でも、初めのうちは全くしゃべれませんでした。でも幸いにもバドミントン部の女子はいい性格の人ばかりで、少しずつではあったけれど、二年生の終わり頃には何の分けへだてもなく話せるようになりました。つらいときには相談に乗ってくれたり、おしゃべりをしているときはとても楽しいです。

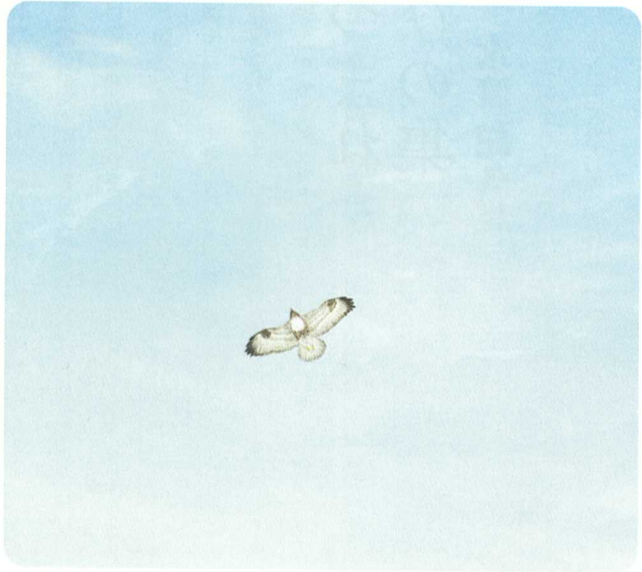
男子だけでなく、女子にも友達がたくさんできたとき、ぼくはふっと小さいころ野球がしたいと言っていたのを思い出しました。もし事故にあわずに、野球をしていたなら、バドミントン部のこんなによい仲間とはめぐり会わなかっただろうということに気づかされました。

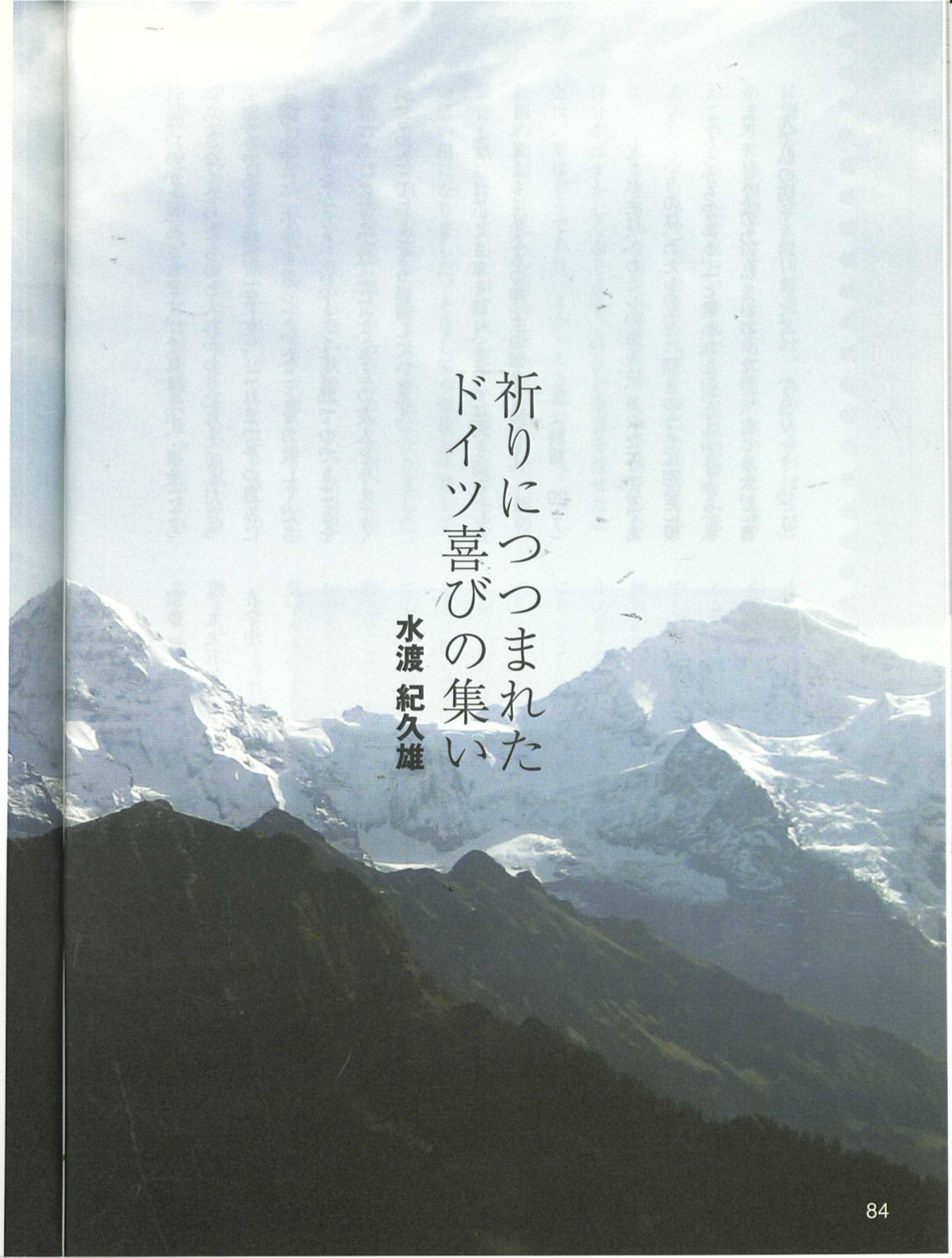
考えてみれば、ぼくは今まですっと、よき友達に囲まれて、そして、もっといろんな人と仲よくできるようになっていく、そんな人生を送ってきたのではないのかと思わされます。それは主が、事故によってできなくなったものと入れかわりに与えてくださった恵みであると確信しました。これまでその恵みに気づかずに、不平を言っていたことをお赦しくださいと祈りながらも、バドミントン部でのできごとを通して、これまで以上にたくさんの友人を与えてくださったこと、とても感謝しています。

ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。
（詩篇　20・7）

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。（2コリント　12・9）

須藤　翼
一九九五年東京都生まれ。三鷹市立第五中学校三年在学中。





祈りにつつまれたドイツ喜びの集い

水渡 紀久雄

そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。（使徒　2・42、46～47）

二〇一〇年十月六日から二十日まで、南ドイツ・フィーリンゲンの地で前半Aグループ101人、後半Bグループ95人の兄弟姉妹が参加して喜びの集いが開催されました。その模様を個人的な感想を含めてご報告します。

「ほとんどの兄弟姉妹が、早朝からこんなに心を一つにして祈ったキャンプは初めて」とは、参加したひとりの姉妹が語った感想ですが、全く同感です。

多くの兄弟姉妹の祈りに支えられて送り出された私たち。その私たちもまた主により頼み、ベック兄の体調、日々の日程、ドイツの兄弟姉妹との交わり、アイドリンゲン・ムッターハウスでの賛美、さらに日本各地の集会のことを絶えず祈りつつ過ごした二週間でした。

主イエス様はその祈りに応えて、毎日たくさんのみことばを与え、主にある喜びで私たちの心を満たしてくださいました。

とくにベック兄の二回にわたるアイドリンゲンでのメッセージのご奉仕を主は守ってくださいました。また兄弟姉妹の証しと、にわか作りの合唱団の賛美のときをも祝福してくださいました。会場を埋めた聴衆を代表して、アイドリンゲンの責任者レナーデ姉が目を潤ませ、「今日はまるで天国にいるようだ」と壇上で感想を語ってくださったときは、こちらも目頭が熱くなりました。「主にだけ栄光を」と願い、霊的一致を求める私たちの思いが、ドイツの兄弟姉妹にも受け入れられたと実感した瞬間です。

「かつて初めてドイツの集会を回ってメサイヤを歌ったときも、音はまちまちだったけど、みんな一生懸命に歌い、祝福された。あのときを思い出した」とは、当時を知る兄弟の感想です。



Unser HERR lebt

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。（詩篇115・1）









日本のみならず欧米各地から集まった兄姉やその親族、友人の方々と行動をともにすることにより、新しい交わりやミニ証しの機会が繰り返し持てたことも感謝です。イエス様をまだご存じない方々を中心に、ベック兄とのお交わりのときも与えられました。

また言葉は不自由でも、ドイツの兄弟姉妹との交わりを通して実感したのは、ともに主を仰ぎ見て、再臨を待ち望む喜びです。天を指さすだけで、その気持ちを伝え合うことができました。「主よ、早く来てください」。

とくに最初から参加されたアンドレア・プレッチ兄は、聖日のメッセージに加え、Aグループの兄弟たちに「自分ではなくイエス様」と信仰の歩みを証ししてくださり、またいろいろな質問に答えてくださいました。印象的だったことは、「ドイツの集会のためにも祈って欲しい」と言われたことです。イエス様とみことば中心の集会から人間の思いが支配する組織へと、集会を変えてしまおうとする動きがドイツでも強まっているということです。

またそのほか、多くのドイツの兄弟姉妹やシュベスターさんたちからも、日本の集会が守られるよう祈っている、と励ましを受けました。

集会以外の日程の中でも、主からたくさんの恵みをいただいたことを感謝します。

Aグループは天候に恵まれ、スイスの山を登山電車で登り、アイガー、メンヒ、ユングフラウの連山を眼前にして、思わず創造の主を賛美しました。

またBグループは天候には恵まれませんでしたが、フランス　コルマールの美術館で名画「十字架のイエスを指さすバプテスマのヨハネ」を見ることができました。今でも「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」、「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません」と、ヨハネの声が聞こえてくるようでした。

このように主イエス様は、私たち弱い羊の群れをあわれんでくださり、ドイツの地でも先頭に立って導き、喜びの集いを守ってくださいました。人間的な思いで「ムリ」と思ったようなことも、主が働いてくださるとき奇蹟のような祝福となり、私たちも新しくされることを改めて体験させていただいたように思います。

その主イエス様に、そしてこの間、日本各地で重荷を負って祈り続けていてくださった多くのご兄姉に心から感謝します。

主を呼び求める者すべて、まことをもって主を呼び求める者すべてに主は近くあられる。また主を恐れる者の願いをかなえ、彼らの叫びを聞いて、救われる。（詩篇145・18〜19）

